名無しの影使い

サソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名無しの影使い

【Ｎコード】
Ｎ４１９５Ｚ

【作者名】
サソリ

【あらすじ】
ある日、目を覚ますと自分が何者なのか覚えていなかった少年魔導士のお話。

原作、設定を遵守しませんので御注意下さい。

プロローグ

～東の森～

フィオーレ王国にはマグノリアと言う街があった。その街の近くには東の森と呼ばれる場所がある。

森を覗いて見ると、覆い茂る樹木に草花。早朝の時間にも関わらず、多くの動物、魔物達が活動している姿が見受けられた。

そんな森には何本かの川が流れている。とある川はせせらぎながら、太陽の燦々と輝く光を受け、水面がキラキラと光り輝く。

そんな川辺にある剥き出しの岩盤には、一人の少年が死んだように眠っていた。少年は１２０ｃｍほどの小さな体に、漆黒に染まった背広を着用。

そして、その漆黒を際立たせるように髪は真っ白である。太陽の光を浴び、純白に光る髪は肩口まで無造作に伸ばされており、その姿は森に似つかわしくない。

また不思議なことに、その少年が寝ていることに気付く生き物は存在しなかった。動物や魔物達は何もいないかのように通り過ぎるのだ。

その時、豪と一陣の風が吹き、少年を黒光りする魔方陣が一瞬覆ったかと思うと

「……ん……」

あたかも、ひんやりとした湿り気を帯びた早朝の空気と、勢い良く流れた風に反応したかのように少年はゆっくりと目を開けた。

その血のように濁りきった両目を。目を開けた少年に飛び込んできたのは、燦々と輝く太陽に雲一つない青空。

耳には静かに流れる水の音が聞こえてきていた。その音と暖かな自然の光を全身で感じた少年は、ゆっくりと、しかし確実に思考を回転させる。

すぐさま体を起こし、辺りを見渡した少年は首を傾げた。

「ここはどこだ？　森……か？　はて？」

少年は疑問を口に出し、再び首を傾げる。そして自分が居る見覚えがない場所を特定しようと、立ち上がりながら思考を開始した。

だが、一向に答えが出ることはない。それもそのはずである。見覚えのある場所じゃない。と言うより、少年の頭の中には見覚えのある場所が一つも存在しなかったのだ。

まるで真っ白なキャンパスのように少年の頭の中は真っ白だった。

ただ不思議なことに木々や川などの知識は存在していた。そして森を、流れる川を始めて見たかのように目を丸くしていた少年は気

付く。

「てか、私は誰だ？」

自分のことすら、憶えていなかったことを……。

…

…

…

困ったことになった。ここがどこか分からないぞ。それに……私は誰だ？私の名前は何だったっけ？

何となく喉から、出てきそうなのだが、これも分からないな。むっ……つまり自分のことが分からない？

……まさか記憶喪失だとでも言うのか？　いや、まさかな。気が動転しているだけだろう。もう少し冷静になって考えてみよう。自分の名前ぐらい思い出せるだろうよ。

そう考えた私は、岩盤に寝転がったまま、思考に没頭する。

……しかし、何時まで経っても、自分自身のことは何も思い出すことは出来なかった。

……ややこしいことになったぞ……。

しかし、そう焦ることはないな。川や木のことは分かるんだ。と言う事は一時的な記憶喪失だろう。

……まぁ、何時か思い出すさ……。

それより、これからどうするかだな。このまま寝転がっていても意味はない。今は、現状の把握をしなければ二進も三進もいかない状況なのだ。

ここがどこであるかも分かっていないからな。さて考えるより即行動だ。そう考え、辺りを見渡したが自然以外何もなかった。

川沿いを歩き出き始めたが、一向に人には出会わない。人工物がないどこかの森みたいだな。

それにしても、森も川も綺麗だ。何だか冒険している気分でワクワクしてきたぞ！

ちょっと森の中を探索してみるか？　何か人の痕跡が見つかるかもしれないからな。

【ぐぅ～】

おっと、その前に腹ごしらえが先だ。結構歩いたからな、私の腹は空きまくりだ。探索の前に飯にしよう。

ふむ、ちょうど川辺に居るのだ。魚でも食べるか。そう思考しながら川をじっと眺めると、光に反射されて私自身の姿が映し出された。

……誰だ、こいつ……。

って、それを考える前に飯だ。飯。腹が減っては何もできないからな。魚はいるかな？

じっと川を眺めると魚が泳いでいるのだろう。いくつかの魚影を見つけることができた。

よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と言ったところだ。

ふむ、釣りをしようにも道具はないし、魔法を使ったほうが早そうだな。

むっ……そう言えば魔法や他の知識は覚えているのか。分からないのは自分だけ？……今、考えると、何だか気持ち悪いな。

って、それより飯を先にしよう。はてさて、魔法はきちんと発動するかな？

【影槍】

そう思考しつつ、ぼそっと小さく呟き、足元に黒光りする魔方陣を展開。

すると、次の瞬間には絶命した魚がぷかぷかと浮かんできた。どうやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して、見事に魚の真ん中を射抜いたようだ。

すでに絶命し、影槍によって幾らか体を失い軽くなった魚は沈むことなく、浮かんでいる。

「ふむ、一丁上がりというヤツだな」

そして、また魔方陣を展開させる。次は自分の影から、にゅるにゅると漆黒の手を数本出す。そして浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし、数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来、上出来。さすがは私だな。よし、食事の時間だ。魚は紫色の鱗で覆われており、美味しそうだ。

「いただきま～す！！！」

…

……

……

「……知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。どこだ、ここは……。確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やっと起きたかい？」

私は知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？もしや……ここは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベッドを置いているものだ。

ん？　ベッドだと？

「聞いているのかい？」

「っ！？……む…誰だ、お前は……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか、本当に誰だ、この婆さんは？

私にいきなり話しかけてきたのは、ワイシャツと長いスカートの

上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。

ピンク色の髪の毛を後ろで団子にして金色の髪飾りで止めている。たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人に、その態度は酷いもんだね。こちらこそ聞くよ、あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？　助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川魚を生で食べただろう。あそこの川魚は焼けば中和されるが、毒を持っていてね。……私が通り掛からなかったら、今頃、あの世行きだよ」

むっ、そう言えば思い出してきたぞ。確か魚を食べて苦しかったような？　と言う事は、この婆さんの言うことは本当のことか？

しかし、人に出会えるとは運がいいな。これで人を探さなくて済むし、現状が分かるな。

「婆さんよ」

私は目を婆さんに合わせる。

「礼を言ってやる。ところでお前は誰だ。ここはどこだ。さっさと

答えないとぶち殺すぞ？」

「……相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい？」

「いや、婆さんの方から聞いてきたじゃないか。だから、そっちの――」

「いいから、あんたが何者か教えな！」

えぇー、理不尽じゃね。なんて婆さんだ。しかも怒っているぞ。短気すぎじゃないのか。てか、名前か……分からないんだよな。偽名でも名乗っておくか。

う～む

……

……

……

はっ！？

これだ！　この名前しかない！！！

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい？」

何！？　舐めているだと？　一生懸命考えた名前だぞ。

「本当のことだ。何だ、その眼は？　人様の名前に文句あんのか？
あぁ？」

「はぁ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ！」

「……」

何だ、婆さん？　そんなに私の目を見ないでくれ。……恥ずかしいじゃないか。

「あんた……もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを！？」

心を読んだのか！？　コイツァ驚いた！？

「……やはり、そうかい」

私が驚いていると、婆さんは口に手を当て、意味深にポツリと呟いた。私のことを知っている？

「何か知っているのか？」

「あんたのことは、知りはしないよ。はぁ、厄介な生き物を拾ってしまったよ。それにネーミングセンス無さ過ぎだ、この子供は……」

何だ、そのやれやれみたいなポーズは……。しかも知らないのかよ。てか

「それよりもお前の名前は何だ。私は答えたんだ。さぁ言え！【ごちん！！】ぎゃっ！？」

「さっきから年上に対して礼儀がなってないよ！」

ぐおぉ、何て力で叩きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出来てきてるじゃないか。

ぐおぉぉお、ジンジンするぅ

「……ワタシの名前は■■■だ」

「あん？頭さすってたから聞いてなかった…もう一回言え「何だって？」……ってください。お婆様♪」

恐怖！？　そんな目で睨まないでくれよ……それにしても何て目だ。きっと他の人間にも恐れられてんぞ、この婆さん。

この婆さんには逆らわない方がよさそうだな。命がいくつあっても足りないような気がする。

「まぁ、いいだろう。ワタシの名前はポーリュシカだ」

……ポーリュシカ……知らない名前だ。

「そしてここはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？　……そんな国、聞いたことないぞ。どこだ、ここは！？

虚ろ

婆さんに拾われて数ヶ月が経つ。

最初は知らない国で暮らすことは戸惑いも多かったものの、さすが私と言えよう。たった数ヶ月で大分ここでの暮らしにも慣れてきた。

既に婆さんの家は私の家同然だ。しかし、しかしだ。記憶の方はさっぱりなんだ。残念ながら全くと言って良いほど、何も思い出すことは出来ないのだ。

思い出すために色々と試行錯誤はやっているんだ。

朝の森林浴は日課だろ。それに昼はベッドでゴロゴロ。夜は瞑想などをしている。そしてご飯は満腹になるまで食べている。むぅ……これだけ一生懸命に頑張っているのだが、一向に思い出す気配はない。

そんな風に毎日が大変な私である。ちなみに現在は初めて目を覚ました場所。つまり川がある場所で森林浴をしている。

空にはたゆたう雲が流れ、そよそよと吹く風が心地良い。

あぁ、私は生きている。

「……あんた、働きな……」

「え？」

そんな風にいつも通り頑張っていると、婆さんの声が聞こえた。

「……何だ、幻聴か……」

「もう一度言うよ。あんた働きな」

「はい？」

どうやら幻聴ではなかったようだ。私の視界には無表情で何やら目つきが怖い婆さんがいた。

…

…

…

爛々と太陽が照り、雲がたゆたう朝の時間。

フィオーレ王国にある東の森にはナナシとポーリュシカがいた。

「……なんだ幻覚か……」

虚ろな目で空を見上げていたナナシは、ポーリュシカを見てそう呟くと再び空を見上げ始めた。

それを無言で見ていたポーリュシカはつかつかと歩み寄り拳を握ると

「痛っ！？」

ナナシに向けて振り下ろした。

「あにすんだ！　ババァ！」

涙目で叩かれた頭を抑えているナナシは口を開くが

「毎日、毎日、グータラグータラ！少しは働いたらどうなんだい！」

「馬鹿やろう！　私は記憶を思い出そうと頑張っているんだよ！見てみろよ、この気合いの入った目を！」

「……虚ろだね。あんたは記憶喪失を逆手に取って働きたくないだけだよ。言い訳はいいから来な！」

「違っ！？　痛い痛い痛いっ！？　やめて！」

小柄な体であるナナシは抵抗らしい抵抗も出来ずに、ポーリュシカに引きずられて森の奥へと消えてしまった。

その後、とある木の家では

「嫌でござる。働きたくないでござる～」

「駄々をこねるんじゃない！　さっさと薬草を集めて来な！」

と言う会話があったとかなかったとか。

認識

〜数週間後〜

「だぁ！　薬草なんぞ知るか！　見付けれる訳がないだろうが！」

とある日の午後。分厚い本を片手に森の中を歩くナナシの姿があった。

「円月草だぁ！？　んなもん。どこにもない！」

開かれたページには、薬草らしき絵と説明が書いてある。どうやら、それを見ながら薬草を探しているようだ。

「大体、こんなことをしてる場合では……」

ぶつくさと文句を言いながら探すナナシであったが、一向に目的の薬草は見つからなかったのである。

「ダメだ……今日は諦めよう。適当に嘘付けばバレないだろ」

…

……

……

あ～はいはい。薬草なんて見つかりませんでした。大体、薬草の知識なんざないんだよ。こんな絵が書かれた本だけで探すのは無理だ。

ったく、婆さんめ！　帰ったら満腹になるまで飯を食ってやるからな。見てろよ、肉を食っ……ん？　誰だ、アイツ。

私が婆さんの愚痴などを呟きながら歩いていると、婆さん家の前に誰かいた。白髪に身長は私より低い、年老いた男だ。

誰だアイツは？こんな森の奥で婆さん以外の人間は見るのは初めてだ。婆さんは人間嫌いらしいからな。あまりと言うか全くと言って人間と接しないのだ。

ん？　あれ？　そう言えば私は大丈夫なのか？　もしかして私は人間と認知されていないのか！？　ひ、ひでぇ。……だから穀潰しだの。グータラだの。ズボラだの、言われるんだな……。

ふむ……ところであのジジイは誰だ？　婆さんに友がいるのは有り得ない。また婆さんを訪問するのも有り得ないだろ。

「はっしょん！」

むっ、風邪を引いているのか？　と言うことは婆さんが作る薬が

目的か。婆さんは薬を作れるからな。貴重な薬を狙う盗人やもしれんな。面倒ごとになる前に一度、捕縛するか。

うむ、そうと決まれば即実行だ。

【転影移】

そう小さく呟き、自分の影に沈むと不審者の影へと転移した。

…

…

…

影へと潜ったナナシは老人の影からぐぷりと姿を現した。一方、小柄な老人はナナシが姿を現したことに気付いていない。

どうやら気配を感じ取ることができないぐらいにナナシの隠密性は高いようだ。小柄な老人は終始、鼻水が垂れてくる鼻を啜っている。

どうやら風邪を引いているらしい。これも気付くことが出来ない要因の一つだろう。一方、ナナシは影から鈍色な光るナイフを取り出すと、柄の部分を躊躇なく小柄な老人に向けて横薙ぎした。

（気絶しろ）

その行為は淀みなく、小柄な老人の首筋に向かっていたが

「マスター危ない！」

「むっ？　おおっ！？」

もう少しで首筋に達しようとした時、どこからか少女の疳高い声が響き、小柄な老人はナイフを寸前で避けることが出来た。

「ちっ」

避けられたことに舌打ちをしたナナシは、後方に下がろうとするが

「あ？」

背後から接近した誰かが剣を振り下ろしていることに気付き、そのまま振り返ることなく

「マスターを狙った曲者が！」

【ガキン！】

急いで影から出し、もう片方の手に持ったナイフで受け止めた。
ガチガチと銀色に輝く剣と鈍色に光るナイフの鍔迫り合う音が響く。

（前にはジジイ。後ろには……）

瞬時に頭を回転させ状況を理解したナナシは、

「ふっ」

小さく息を吐いて力を抜き、鍔迫り合いに負けたように見せ掛け

「おら！」

再び体を半回転させながら、勢い良く腕を振り剣を弾き返した。
ガキンっ！という疳高い音が響く。ナナシは鍔迫り合いを征したが、
油断することなく体勢を取りながら睨む。

「……ガキだと……」

そこにはセミロングの赤髪の少女が居た。髪は三つ編みにしている。そして上半身に鎧を付け、下半身にはスカートを纏っていた。

また少女は弾かれた剣をなんとか握っているが、手が痺れているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「エルザ！」

マスターと呼ばれた老人は少女の名前を言い、お返しとばかりに、少女エルザは

「ここはお任せを！　マスターを狙った不届きものは私が排除します！」

そう言い、弾かれたことによって崩れた体勢を立て直しながらナナシに剣を向けた。

エルザｖｓナナシ

対峙するナナシとエルザの二人であったが、対峙する時に流れる特有の静けさが漂う前に

「あ？不届き者だと？ふざけんじゃねぇ！ここは私の家だぞ。不審者が！」

そう叫んだナナシによって戦いは始められた。ナナシは腰を落とし、素早く動きながらエルザに襲い掛かる。

「おらよ！」

「くっ！？」

左手で刃渡り１５センチほどのナイフを振るい、刺し、時には薙ぐ。その度にエルザも同様に払い、穿ち、時には避ける。

「はぁ！」

「おらっ！」

エルザが振るえば、ナナシも振るう。その逆もしかり。ガキンと

何度も打ち合い時折、火花が迸りながら戦いは熾烈を窮め始めた。

（ちっ、拉致があかないな）

だが、まだ序盤であるにも関わらず、勝負が着かないことにイライラし始めたナナシは新たに動き出した。

「しっ！」

一度打ち合いを止めると、後方に下がりながら、素早く右手に持ったナイフを投げたのだ。ナイフの軌跡は真っ直ぐエルザに吸い込まれるように向かってくる。

「むっ」

エルザは突如、飛来して来たナイフを剣で弾き飛ばす。そして再びナナシに接近しようとした時

「おせぇよ！　不審者！」

【影槍！】

「なっ！？」

ナナシがそう唱えるとエルザの足元に出来た影から漆黒の槍が飛び出した。

【ガギッ】

すると、すぐに何かがぶつかり合う鈍く小さな音がした。

「し、しまった！？剣が！？」

それはエルザの剣が根元から砕け壊れた音だった。影から飛び出した鋭く尖った槍が剣の柄を貫き、刃と柄を切り離したのだ。

それを見たナナシは勝負が着いたと感じたのだろう。不敵に笑い、器用にナイフをくるくると回しながら喋り掛ける。

「格好、装備からして、お前は剣士だよな。剣無き剣士は何が出来る？」

「何？」

「降参した方が身のためだぞ。不審者が！」

そう言い再び襲い掛かろうとするが

「フェアリーテイルの魔導士を舐めるな！」

【喚装！】

そうエルザが唱えると、虚空からすぅと一本の剣が出てきた。先程エルザが持っていた剣と全く同じものだ。それを素早く掴んだエルザは剣を振るった。

「はぁ！」

「魔導士だと！？」

余裕を出し笑みを浮かべたまま接近していたナナシは、剣を虚空から出したエルザに驚き、反応が遅れ攻撃を許してしまった。

「ちぃ！？」

ギリギリで避けるものの何本か切り取られた髪がはらはらと舞い落ちる。

（あ、危なっ！？）

額に汗を欠いたナナシはエルザに喋りながら睨み付けようとする。

「まさか魔導士だったとは思わなかっ「ふん！」ぎゃぴっ！？」

だが、エルザはナナシの言葉を聞くことなく、剣の柄で頭を叩き、いとも簡単に気絶させた。

「……ぁー……」

地面に倒れたナナシはピクピクと動いているが、一時の間は目を覚ますことはないだろう。何とも呆気ない結末の戦いであった。

「全く、手こずらせて」

「何者かの？ズズッ」

今までエルザ対ナナシを傍観していた老人は鼻を啜りながら近付く。

「分かりません。ただマスターを狙ったことだけは判明しています」

「う～む」

風邪の為だろう。顔を赤くさせ鼻水を垂らしながら悩む老人だったが、

「あっそう言えば……ここは自分の家だと言っていました。しかしここはポーリュシカさんの家のはずです」

（うむぅ、自分の家？ポーリュシカの？　……まさかの……）

ふと、エルザが思い出した内容に老人が思考しようとした時

「人ん家の前でドンパチとは度胸があるね。マカロフ」

木で出来た家から扉を開けてポーリュシカが出て来た。その顔は非常に不機嫌そうに歪められている。その姿に老人マカロフは冷や汗を流す。

「よ、よぉ。久しぶりじゃな、ポーリュシカ。実はの、この小僧が……」

「その子は私の預かり子だよ。全く、バカな子なんだから。バカに付ける薬はないからね。そのまま寝かしときな」

「ほぅ、お主が子を世話とはのぅ。いやいやまさか……のぅ？」

「……あんたも風邪を引いてバカになったようだね。早く入りな！風邪なんかで死にたいのかい！」

何か含みのある言い方をしたマカロフに、片眉を上げたポーリュシカはそれだけを言う。

そして扉を開けたままイラついたように歩き、家の中へと入っていった。その背中は言葉通り、早く来いと語りかけているようだ。

対してマカロフは

「そ、そ～怒るな。待つのじゃ、ポーリュシカ！　おぉ、エルザよ、その子を頼むぞぉ～」

「は、はい」

慌てながらポーリュシカを宥める言葉を発した後、隣に佇んでいたエルザにナナシのことを頼むと家へと入っていく。

「全く、どうして私が……」

残されたエルザは、はぁと溜め息を吐いた。

「あれぐらいで気絶するとは……全く……世話が掛かる奴のようだな……」

気絶したナナシの顔を見ながらそう呟く。そして、まだ少し痺れる手でナナシの足を掴み、ズリズリと引っ張りながら家へと入っていった。

記憶

現在は陽が沈み掛け、茜色に空が染まり始めた時間である。

小一時間前に自室で意識を取り戻した私は、すぐに起き上がり、婆さんが無事か確認しに走った。

痛む頭と体を抑えて……。すると、すぐに無事な姿の婆さんを発見したのだ。何とか飯は食えるようだ、よかった。

……しかし安心した束の間……。

『そこに座りな。正座だよ』

『えぇー』

すぐに婆さんから事情の説明と有り難くない説教を頂戴したのだよ。理不尽だと思いつつも話を聞いてやっていると色々と情報を収集することが出来た。

その中で一番驚いたのは、不審な爺さんが婆さんと旧知の仲であると言うことだ。まさか、婆さんに友が居たとは……。

私にとっては驚きの何モノでもなく、何度も聞き返していたら叩かれてしまった。

全く、あの婆さんは短気なんだから、困ったものだよ。ちなみに

爺さんの名前はマカロフ・ドレアーと言う。

何か偉い人なんだとよ。確か……フェアリーテイルだったかな？

そこの魔導士ギルドのマスターだそうだ。魔導士ギルドとは魔導士達の集まる組合で魔導士に仕事や情報を仲介する場所らしい。

まぁ私には何の関係も縁もない場所なのは明白だな。そして、忌々しいが私を接近戦で倒した女は、フェアリーテイルに所属する魔導士だそうだ。

女の名前はエルザ・スカーレット。年は12歳。爺さん曰わく将来が楽しみな人物らしい。

そして爺さん達の話を聞いた後、私も自己紹介してやったのだが、

『『偽名か？』』

と、二人同時に言いやがった。偽名じゃなく、本当の名前だ。何て失礼な奴らだ。確かに考えた時は偽名だったけど今は違う。

心で叫びつつ婆さんも何か言ってやれよ。と話を振ったらネーミングセンスがないだの。普段からグータラしてるからだとか、何故か説教が再開してしまった。

全く持って意味が分からない。何故あそこから説教に行くんだよ？　私の名前は分かりやすくて最高じゃないか。

婆さんこそネーミングセンスがないのではないか。世の中、間違

っていると思うのだが……。

「聞いているのかい！」

おっと、まだ婆さんの説教は続いていたのだった。

「ちゃんと聞いてました！」

「……本当かい？……」

「当たり前だろうが！」

私がそう答えると婆さんは訝しげに此方を見てくる。全く、失礼な婆さんだ。

「……じゃあ、今までのように散発的じゃなくて、明日から毎日、薬草採集をしてもらうからね」

「聞いてないぞ！？あぶんっ！？」

「やっぱり聞いてないんじゃないのさ！それに今日頼んだ薬草はどうしたんだい！」

「しょ、しょれは～」

婆さんの口から信じられない言葉が飛び出し、驚愕の声を上げると、ビンタされてしまった。

い、痛くてマトモに喋れない。

「どうせ見つけ切れなかったんだろう？今すぐ探してきな！」

「ちょっ、わたひのはなひを」

「言いかい。見つけてくるまで戻ってくるんじゃないよ」

「きひてく……おひゃっ……」

言い終わった婆さんは私の言い訳を聞く前に首根っこを掴むと、外へと放り投げやがった！

「いきなりひゃにすんだ【バタン】……よ……」

抗議の声を上げるも、その前に扉はぴしゃりと閉められた。

てか今から薬草採集だと？　今は夕方だぞ……もう暗くなっているのに見つけれるわけがないじゃないか！？

…

…

…

ナナシを外に投げたポーリュシカは溜め息を吐きながら椅子に腰を降ろす。

「かなり変わっとるの。面白い子じゃ」

「何が面白いもんさ。毎日、あの調子だよ。子供のお守りは大変さね」

呆れた表情で対面に座ったマカロフにそう答えると、テーブルに置いてある紅茶を啜る。マカロフは今だに鼻水を啜っていることから、風邪はすぐに治らないようだ。

「大変ならウチのギルドで預かってもよいぞ？」

「駄目だね」

「ん？何故じゃ？」

「あの子は実質、生まれて数ヶ月しか経っていないんだ。言動もしっかりしてないから大衆の中は無理さ。思考も何を考えているか分からないほどだしね。それでも最近ようやく、人間として安定してきたんだ。自分のことも考え始めたしね。だから、あと一年はじっくり育てる必要があるよ」

「しかし、お主と森の中だけじゃったら成長はあまりせんじゃろ？年は大体、エルザ達と同じ頃じゃろうから同世代と居らせた方がよくないかの？」

「……私はギルドに入れるのは反対だよ。……まぁ、あの子の意思次第だがね」

そうポーリュシカとマカロフが話す間にも

『開けてくれ！　まずは話し合おう！』

ドンドンと扉を叩く音が聞こえてきていた。どうやらナナシは薬草採集に出掛けずに抗議をしているようだ。

そんな喧しい音や声を聞いて、席を離れていたエルザが帰ってきた。そしてエルザは眉を寄せながら尋ねる。

「うるさい奴だな。あの……ところでポーリュシカさん……」

「ん？　どうしたんだい？」

「ナナシと言う名前は本当なのでしょうか？」

「残念ながら本当さ」

「……信じられません……」

「信じようが信じまいが、あの子がそう名乗ったんだ。あの子はナナシ・ネームレスだよ」

「……自分で名乗った……」

その言葉に疑問を感じたエルザは、頭を悩ましながら考えると、一つの答えを導き出したようだ。

「もしかして自分の名前が分からない？　記憶喪失ですか？」

「さぁね。それはあの子に自分で聞くといいさ。それとついでにあの子の友になってくれると有り難いね」

「友……ですか？」

「知り合いは私しかいないからね。かと言って自分から友を作るような子じゃないからね。どうだい？」

「知り合いが一人しか居ないのは可哀想ですね。分かりました！マスター、少し席を外します」

「おぉ、行ってくるがよい」

ポーリュシカから頼まれたエルザは気合いを入れながら扉へと向かう。

「ん？」

しかし、ドアノブを握った所で何かに気付いた。さっきまで聞こえていたナナシの声と扉を叩く音が聞こえないのだ。しかも人の気配が全くない。

「諦めて採集に行ってしまったのか。早くいかねば見失ってしまう！」

そのことに気付いたエルザは慌てて扉を開け外へと飛び出して行った。

「ギルドには入れないよ。でも友は作った方がいいからね。あの子にとっては押し付けがましいけど、これでいいだろう？」

「たぶんの。エルザなら今日中に良き友になってくれるじゃろう。儂が保証するぞ」

「……まぁ、あの子を見付けることが出来るならの話だがね……」

「むっ？」

何か含みのある言い方にマカロフは疑問を感じた。だが、ポーリ

ュシカが指差す方向を見ると、すぐに答えを見つけたようだ。

「……なんと……」

ポーリュシカの指先は床が示されており、その床には人影が出来ていた。その不自然で不気味な人影はゆっくりと動き、部屋の奥へと進んでいた。

「あんた、薬草採集は終わったのかい？」

【ビクッ】

その人影にポーリュシカが尋ねると、ぐにゃりと人影が揺れる。

「採集して来なかったら、当分の間は晩ご飯抜きだからね」

そう言われた瞬間

『ナンテコッタイ！？』

そう声を出すと人影は慌てたように扉を抜け、外へ飛び出していった。

「風邪を引いてるとは言え儂も気付かんとは……恐ろしいほどの隠密性じゃな。先程の奇襲と言い、一体何者だったんじゃ？　子供にしては手慣れすぎておる」

「……さぁね……。私には、ただの子供にしか見えないね」

唖然としながらズズッと鼻水を啜るマカロフと、静かに紅茶を飲むポーリュシカであった。

……

……

……

失敗だ。せっかく影に潜り、こっそりと自室に帰るという計画を取っていたのに見つかるとは……相変わらず勘が良い婆さんだよ。

それにしても脅しは横暴だと思う。ましてや晩飯抜きなど残酷にもほどがある。って、それより早く薬草を見付けねば、暗くなってしまう。急ぐかとするか。

それから数十分、影の中から取り出した本を片手に探し回ったが、円月草を見つけることは出来なかった。何故だ！　本に書いてある通りの薬草なんぞ、どこにもないぞ。

それに似た形の雑草ならあったが……。どこだ！　円月草ぉ！

「むっ。やっと見つけたぞ！　ナナシ！」

「……」

その時、ガサゴソと音がすると、茂みの中から野生の魔物が姿を現した。魔物のくせに髪は赤いわ、鎧は着けてるわで、初めて見るな。どうやら新種の赤い魔物のようだ。

「おい！　聞いているのか！」

こういう時は無視が一番である。目を合わせたらダメだ。さっさと円月草を探そう。

「円月草やぁ～い。出てきておくぶべし！？」

「聞いているのかと言っているんだ！」

ちょっ、いきなりビンタだと！？　今日、初めて会ったばかりの人にそれは酷くないか！？

「クソアマ！　いきなり何しやがる！？」

「私の名前はクソアマではない。エルザだ。さっき家で教えただろうが……」

「えるざ？誰だお前？魔獣エルザんの間違いではないのかぁ？」

「記憶障害がここまで酷いとは……全く、しょうがない奴のようだな……思い出させてやろう」

ん？　何だよ？　戦闘準備だと？　おもしろい！　私だって女に負けるのは悔しかったんだ。次はボコボコにしてやる！

……

……

……

「私は誰だ？」

「え、エルザ様です」

「ちゃんと理解したようだな。あぁ、様は付けなくていいぞ。」

「は、はい！」

「それにしても捜したんだぞ」

「硬っ！？」

はっ！？　今まで何を？　てか、私はエルザ様……ではなく、エルザに抱き寄せられているではないか。何だ、この状況は？

それにしても上半身に装備している鎧が頭に当たって痛い。自宅前の戦闘で怪我した所に当たって非常に痛い。二度攻めかぁ！

「痛っ。ちょっ、離せよ！」

「むっ……あぁ、いいだろう。それよりも頭は大丈夫か？記憶は思い出しそうか？」

私を離したエルザは心配そうな態度で語りかけてくる。てか記憶喪失だと誰が喋ったんだ。　婆さんか？　余計なことをしやがって。

「おい、聞いているのか？　今日から私達は友だからな。困っていることがあったら私を頼るといい」

……

……

何だ、コイツ。私達は今日初めて会ったんだぞ？いきなり友ってなんだよ。て、てか何だよ、その心配していますみたいな目は！？

エルザが心配そうに見てくる様子に、調子を崩されたナナシはガリガリと頭を掻く。

「いや、お前に心配される筋合いはないんだが……てか友ってなんだよ？」

「記憶がないというのは大変だろう？　それにポーリュシカさんに聞いたぞ。一人で寂しかったそうだな」

「いや、別に……」

「辛かったな。悲しかったな。もう私がいるから大丈夫だ」

「何の話だ？」

どうやらエルザの頭の中では、ナナシに記憶喪失かどうか聞く前に答えが出ていたらしい。

ナナシを捜す間に色々と妄想してしまったようで、既にエルザの目には記憶喪失者ナナシとして写っていた。それにプラスして友が居ない寂しさに囚われている少年としても写っている。

どうやらエルザの頭の中で、かなり話が飛躍してしまったようだ。

「私達が出会ったのも何かの縁だ。記憶を取り戻すことに協力しようと思ってな」

エルザは胸を張りながらそう言うと

「これで頭を叩けば思い出すのではないか？いやこれか？いやいやこれだろう」

次々に武器を虚空から出現させて始めた。それを見ていたナナシは

「……こ、殺される……」

身の危険を感じ、顔を真っ青にすると、ガタガタと震え始めていた。先程あった、しかしナナシは覚えていない戦闘の前に、悔しいと憤っていた姿は微塵も感じない。

いや、戦闘でよっぽのことがあったのだろう。既にナナシは悔しいさを忘れ、むしろエルザに怯えているようだ。

ナナシが無意識に怯えていると、嬉しそうに微笑んでいるエルザは一振りの巨大なハンマーを手に取る。

「うむ、まずはこのハンマーで、ふん！」

そして躊躇なく目の前にいるナナシに目掛けて振り下ろした。

【バゴンッ！】「危なっ！？」

ナナシは当たる寸前に、ギリギリ回避し転がる。元の場所を見ると、見事に地面は凹んでいた。

「……無茶苦茶だ……」

「逃げるな！」

「逃げるなじゃない！　殺す気か！　それに頭を叩いて記憶が戻るわけがないだろうが……」

「大丈夫だ。これは魔法剣の一種だからな。頭に衝撃を与えるだけだ」

「死ぬよ！？」

「そうか？　グレイは大丈夫だったぞ？」

キョトンとして聞いてくるエルザにナナシは深く溜め息を吐く。

「グレイとやらが誰かは知らないが、止めてくれ。頼むから本当に止めてくれ。私はまだ死にたくないぞ」

「むぅ、仕方ないな」

「まずは落ち着け。大体、本音を言うとだな。私はな、無理矢理、記憶を思い出そうとは思っていないぞ」

「何故だ？　大切な記憶があるかもしれないのだぞ！」

「今の私はナナシだ。記憶なんざ、何時か思い出すさ」

エルザの疳高い声が上がり、それに耳を抑えた後、ナナシはぶっきらぼうに答えていた。

「お前は自分が何者か知りたくないのか？」

「私はナナシなんだ。ナナシ・ネームレスという一人の人間なんだよ」

「意味が分からないぞ！」

「分からなくて結構」

それから何度も押し問答があったが、

「分かった。お前が言うんだ。仕方ない」

結局、溜め息を吐いたエルザが折れ、ナナシの記憶のことは以後、口出しをしなくなったのである。

「だが、記憶関係じゃなくても困ったことがあったら私を頼れ。いいな？」

「ん？　いいのか？」

「当たり前だ。困ったら何時でも頼ってくれて構わない。なんせ私達は今日から友だからな」

「友……何時でも頼っていい奴のことなんだよな。分かった。覚えておこう」

「うむ、今日からよろしくな♪」

「あぁ、よろしく」

その返答にエルザは満足げに頷いていると、ナナシが分厚い本を差し出してきて喋り出す。

「ではさっそく。エルザよ、薬草を探せ。円月草だ。いいな？」

「……何？……」

「私は薬草を見つけきれなくて困っているんだ。早く探してこい。あーあと、腹が減った。果物を取ってこい。それに……」

エルザに本を押し付けているナナシは、友のことをパシリか何かと認識していたようだ。先程の怯えは何のことやら、ナナシは調子に乗り喋り続けたが、その勢いはすぐに止まることとなる。

「明日から私の代わりに薬草を採集しろ。おぉそう言えば肩がだるいな。友よ、肩を揉おわっ！？」

「お前は友と言う言葉を履き違えているようだな。友になる前に教育が必要のようだ。来い！エルザ先生がみっちり教えてやる！！！」

「痛い痛い痛い！？　なして！？」

ナナシの言葉に怒りで肩を震わせていたエルザは、ナナシの首根っこを力強く掴む。

「こら！　大人しくしろ！」

そして抵抗するナナシを引きずり森の奥へと消えていったのであった。

その後

「只今戻りました」

「友は対等な関係、対等な……」

すっきりとした笑顔のエルザと顔面蒼白で円月草片手に、ぶつぶつと呟いているナナシが帰ってきたそうな。

「あぁ、ナナシ。これから毎週、私が休みの日はレッスンだからな。みっちりお前を鍛えてやる」

「ひぃ！？」

記憶（後書き）

今まで、ナナシが記憶を思い出したいと言っていたのは、ナナシが仕事から逃げる口実でした。今回のが本音です。

年齢

現在は夜である。

何とか円月草を採取して来た私は無事に夕食を食べることが出来た。その夕飯中に爺さんから聞いて驚いたのだが、婆さんは何と高位の治癒魔導士らしい。

ただの薬草大好き婆さんではなかったようだ。まさか、こんな近くに魔導士がいたとは……。

ちなみに、今は夕食も食べ終わりソファーでゆったりとしている。私の後ろには椅子に座っている爺さんとエルザがいる。何でも今夜は泊まっていくんだと。

婆さんは人間嫌いのはずなのだが……と夕食中に疑問に思っていた所、爺さんが囁き声で教えてくれた。

どうやら病人には比較的優しいらしい。ちなみに、別室で今も婆さんは爺さん用の薬を作ってるため嘘ではないだろう。

ふむ、病人には優しいとは新事実だ。そしてよくよく考えてみる。

人間である私がここで生活出来るということはだな。……つまり、つまりだ。婆さんにとって私は病人なのだ……

「ナナシよ。少し尋ねたいことがあるのじゃが……」

信じられない。　私は病人ではないぞ。もしかして記憶喪失のことが病気なのか？しかし、婆さんには散々言ったはずだぞ。私自身は記憶喪失ではないと……。

ちゃんと理解してくれていたはずだったんだが……それでも私は病人と見られているのだろうか？

「ナナシ！って聞いておらんの」

「マスター、私がしましょうか？ナナシの扱いは大分理解したつもりです」

「……早いのぅ。まだ会って1日も経っておらんぞ？」

「意外に単純な性格でしたので」

「それよりさっきから何をしておるんじゃ？」

「ナナシの教育を明日から行うので計画書を書いています！」

「さっき、ポーリュシカから頼まれたやつか」

「はい。どうせ私も勉強しないといけませんので、そのついでに教えていこうかと」

後で、婆さんにしっかり私のことを伝えておこう。だが今、動く

のは嫌だ。今日の疲れを癒しているからな。

今日は婆さんと出会った時並みに忙しかったのだ。久しぶりに活動した日と言えよう。まぁ、こんなにゆったりとして居られるのは、エルザが薬草採取に協力してくれたおかげだ。

エルザの助言のおかげで薬草を見つけることができたからな。居なかったら今日はヤバかったかもしれない。

ちなみに、円月草に似た雑草がまさにそれだったのだよ。あれは驚いたな。本当にエルザには感謝しないといけないな。

ただ、エルザ先生の授業は今夜限りで終わりにして欲しい。あの授業はスパルタすぎる。

こう、ずばーん！　と凄く大変だったのだ。

ずばーんだぞ！　ずばーん。

そしてずどーんだ。

「聞いておるか！　ナナシ！」

こう、ずどーんって

「ナナシ！！！」

むっ？　背後にいた爺さんが何やら話し掛けてきたぞ。

「うるさいな。声のトーンを落とせ。婆さんに怒られるぞ」

「ようやく気づきおったか」

呼ばれたので振り返ってみると、案の定、爺さんが此方を見ている。だが呆れ果てたような顔だ。

ふむ……自分の風邪ひき具合に呆れ果てているのだろう。まぁジジイだからな。風邪でぽっくり逝く可能性もあるし、風邪を引いたことを反省しているのか。

さて、そんな爺さんよりも気になったのは視界の端に写るエルザの方だ。

「むぅ。ポーリュシカさんから渡される本の量から……やはりナナシには毎日勉強させないといけないようだな」

エルザは真剣な顔で何やら呟いている。しかし、初めてしっかりと顔を見たな。意外に真面目な顔は凛々しくて可愛い……。

って、私は何を馬鹿なことを考えているんだ。あれを可愛いとは私の目は腐っているんじゃないのか。

そんなことを思考しながら立ち上がってエルザを見てみる。どうやらエルザはテーブルに大きな紙を広げて何やら書いているようだ。

何だか悪い予感がするのは気のせいだろうか。

「お主は何歳じゃ？」

おっと、爺さんと話していたのだったな。ふむ、年齢か。しいて言うなれば一才にも達していない。

しかしまぁ、爺さんにあのことを言っても意味はないので……確かエルザが１２歳だったか。ならば私は

「２４歳だ」

「何だと！？有り得ないぞ！」

むっ。何でエルザが話に入ってくるんだ。しかも何だ、その驚いた顔は？

「私より身長が低いじゃないか！」

「何言ってんだ。私は２４歳だ。てか身長で決めるな！」

「いや有り得ない」

何て失礼な奴だ。確かに私の身長はエルザより低い。

しかし、しかしだ。私も成長している。この数ヶ月で１３０を越えたんだ。エルザなんぞ、すぐに追い抜いてやる！

だから年齢はエルザより二倍の２４歳で問題ないはずだ。

「お前はどう見ても私より年下だ！」

「馬鹿野郎！　私は２４歳だ！」

「ナナシよ。お主はせいぜい８～１２歳が限界じゃぞ。２４歳はちょっとのぅ」

爺さんもか！？　呆れた顔で此方を見るな。てか

「エルザより年が低いわけがないじゃないか。私をバカにしないでくれよ……」

「何だと！？」

「その自信は一体どこから来るのか不思議じゃのぅ」

…　　…　　…

その後も売り言葉に買い言葉が続き、言い争いは熾烈を極めた。何故か意固地になったナナシとエルザが考えを改めることはなかったからだ。

「何の騒ぎだい！」

「おぉ、ポーリュシカ」

だが、薬の調合からポーリュシカが帰ってくると状況は一転した。

「婆さん、聞いてくれよ。私は２４歳だよな？」

「いえ、ナナシは私と同じ１２歳か、それより下です！そうですよね？」

新たにやってきた訪問者に近づき、絶対の自信を持って喋り掛けるナナシとエルザ。だが額をピクピクと震わせていたポーリュシカは二人を冷たい目で見る。

「「「ひっ！？」」」

その目を向けられた二人と何故かマカロフまでも小さく悲鳴をあげる。まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

「一体、何時だと思っているんだい！」

そう言い放つと躊躇することなく、拳を握った状態でナナシとエルザの頭を叩いた。

「「……痛い……」」

「夜遅いのに騒ぐんじゃない！」

「ちげぇよ。騒いでるんじゃない。私の年齢をだな……」

「あんたは12歳で決定だ。反論は認めないよ」

「そんなぁ！？」

「それよりもあんたは風呂を掃除してきな！」

「理不尽だぁ」

結局、ポーリュシカの言葉でナナシの年齢は決まってしまった。
反抗すれば、ご飯抜きが待っていると理解したナナシは逆らえず、
落胆しながらと風呂場に向かっていく。

「……私は12歳なのか……」

「やはりな。今回の勝負も私の勝ちのようだ。ふふっ」

一方、エルザは腕を組み、ナナシを見て不敵に笑っていた。

だが

「あんたの方は終わったのかい？」

「……まだです……」

ポーリュシカの矛先がエルザに向かうと、タジタジと言葉を喋るだけ。どうやらエルザもポーリュシカは恐いようだ。

「だったら早くおし。あんたがしたいって言いだしたんだよ」

「さ、早急に終わらせます！」

そう言うと、急いで椅子に座りテーブルにある紙と睨めっこし始めた。

「さすがはポーリュシカじゃな……恐ろしのぅ……」

そんな一部始終を見ていたマカロフがそう呟く。だが、まさか自分にも矛先が来るとは考えていなかったのである。

「何、ボケッとしてんだい。マカロフ？」

「わ、儂か！？　儂は何もしておらんぞ！？」

「何もしてないのが問題さ。あんたが居たのにどうしてこの子達が騒いでいるんだい？ちょっと来な！」

「や、やめっ！？」

ポーリュシカに襟首を掴まれたマカロフは、ナナシのように引きずられ部屋の奥へと消えた。

「マスター、ご愁傷様です」

リビングではそう言いつつも、ペン片手に手を動かすエルザが居

たとか。

喪失者（前書き）

今回は読みにくいと思います。

喪失者

風呂掃除完了だ。

後はお湯を蛇口から出して待つだけだな。白銀色の蛇口を捻ると勢い良くお湯が出てきた。

木製の浴槽にリズミカルな音を鳴らしながらお湯が溜まっていく。それと共に蒸気が舞い上がり、広い浴室に湯気が立ち込め始めた。

うむ、湯気で前が見えない。さっさと別室に移動しよう。ちなみに、ここの湯の元は温泉だ。源泉を引いて、直接お湯として使っているため非常に熱い。

だから入るときには注意が必要だ。水を足さなかったら死んでしまうからな。さて、そんなことより早く自室に帰って瞑想するか。

「むっ。やっと出てきた。遅いぞ」

「お前、何やってんだ？」

浴室から出ると、そこにはエルザが佇んでいた。腕を組み、何やら嬉しそうに微笑んだ顔で喋り掛けてくる。

「ふふん♪　1日だけだが完成したんだ♪」

微笑む顔が少しだけ可愛いなと思ってしまったが、コイツの笑顔は恐ろしいことの前触れのような気がするな。

「完成？　何の話だよ？」

「明日からの勉強の話だ！」

「勉強？　何だそれ。お前のレッスンなら来週だろ？　（来週は森の奥に逃げよう）」

「私のレッスンとは違う物だ。夕飯時、ポーリュシカさんの話を聞いていなかったのか？」

私の返答に対してエルザは微笑みから一転し、憐れみを浮かべたような目で此方を見てくる。何て失礼な奴だ。

「勿論、聞いていたさ」

「嘘だな」

「聞いていました！」

「じゃあ、ポーリュシカさんが何を言ったのか言ってみろ」

そ、そこまで聞いてくるのか。夕飯時、夕飯時……確か婆さんは……あぁ思い出したぞ。

「風邪を引いてしまった爺さんを怒っていた！どうだ、覚えていただろ？」

「……確かにそうだが、それはナナシには関係ない話だ」

そう言うや否や、エルザは溜め息を吐く

（やっぱりコイツは1人には出来んな。人の話は聞かない。薬草採取も適当。戦闘も弱い。ふむ……ダメダメではないか！？　鍛えねばすぐに死ぬぞ！？）

「私と出会えてよかったな。明日から一緒に頑張ろう」

何を言ってるんだ。話が見えない……

「てか肩に手をおくなよ。何か子供扱いしてないか？　私とお前は同い年に決まったのだぞ？」

「ではナナシ。明日から始まる計画の概要だけ説明してやろう」

え？　無視？

……

……

……

ナナシ教育計画だと！？　あの婆さん！　ふざけたことを始めやがった！

何でも一年間、薬学や魔法などの勉強をしないといけないらしい。私が婆さん無しでも生きれるようにするための措置らしい。

エルザに聞いても、らしいらしいで、よく分からないので婆さんに直接聞くしかない。と言うことで私は婆さんの私室を訪ねるところだ。

「婆さん！　どういうことだ！」

婆さんがいる私室まで急ぎ、ノックもせずに扉を開けた。

「待て、ナナシ！」

背後からエルザが付いてくるが、部屋に入らせないために扉を無

理矢理閉める。

『むっ！　閉めるな！　私も……』

何やら声が聞こえてくるが、それよりも婆さんと話をしないといけないのだ。部屋の中には婆さんが1人で作業をしている。薬でも作っているのだろう。

「どういうことだよ！　私は勉強なんてしたくないぞ！」

「ピーチクパーチクうるさい子だね」

婆さんはうんざりとした表情と態度を隠そうともせず、私の方へと振り返る。

「それじゃあ聞くよ？　あんたは何かしたいことはあるかい？」

「……」

私はピタリと腕を止めた。何故腕を止めたのか、自分では分からない。ただ固まっている私に婆さんは続ける。

「この世界に、この時代に生きているのなら何をしたいのかと聞いているんだよ。毎日寝て食ってグータラしているあんたは何をしたいんだい？」

「……飯を食いたい……」

「それはすることがそれしかないからさ。食事以外に何かしたいことはあるかい？　あぁ……グータラな行動は却下だよ」

「むぅ」

何をしたい？　いきなり、そんなの聞かれても分からねぇよ。食事は好きだ。グータラするのも好きだ。しかし婆さんは、それは駄目だという。ならば、それ以外に私は何をしたい？

……

……

……

う～む、何かしたいこと？　しいて言うならば私は生きたい。ただ、ナナシ・ネームレスとして生きたいだけだ。

私が記憶喪失者なら記憶を思い出したいと思うだろう。記憶を取り戻したいと躍起になって、自分を知っている人物を探しにいくだろう。

だが私はナナシ・ネームレスだ。断じて記憶喪失者何て奴ではない。確かに、この身体の前の持ち主は記憶喪失者なのかもしれない。

ソイツには楽しい記憶があったかもしれない。悲しい記憶があったかもしれない。

何かすべき任務があったかもしれない。思い出さなければいけない何かがあったかもしれない。だが、私には関係無い。

ソイツが誰なのか、何者なのか、どんな人間だったのかなんて知らない。知らないヤツのことなんか考えようもないのだ。

私は知らない。何も知らない。唯一、この時代と一致するのは魔法と一般知識のみ。しかし、それはソイツを体現しているのではない。

この知識も魔法も、私が産まれた時から覚えていたものだ。断じてソイツの記憶じゃない。今考え、生きている私の記憶だ。

ゆえに私とソイツは既に別の人間である。つまり、私が自分の人生を割いてソイツを思い出してやる義理など微塵もないんだ。

ソイツがソイツ自身を思い出すまでは、この身体は私の物だ。私のために成長し、私のために存在する身体。

ゆえに私は一人の人間なんだ。ナナシ・ネームレスと言う漆黒の背広を纏った白髪に赤目の人間なんだ。

ソイツは何時か現れる。ソイツが記憶を思い出すことによって……。

その時、私と言う存在はソイツと言う存在に消されて死ぬだろう。しかし、その時まで私がこの身体の主なのだ。

「今の私はナナシ・ネームレスと言う人間だ！」

まるで自分に言い聞かせるように腕を振りながら私は叫ぶ。しかし、すぐに疑問が私を襲った。

じゃあ私は何をしたい？　婆さんの言う通りナナシ・ネームレスは何をしたいんだ？

「もう一度聞くよ。あんたは何かしたいことはあるかい？」

「……ないかもしれない……」

この世界で、この時代で、私は何をしたいんだ？　ただ惰性に生活をするのか？　せっかく生きているのに？

しかし私はグータラすることが好きだ。だが、それは婆さんが居てこそ出来ることだ。

婆さんが死んだらグータラに過ごせるのだろうか。いや無理だな。

飢え死にや路頭に迷うのは目に見えている。

しかし何をすればいいんだ？　私は何をしたいんだ？

「やりたいことなんかわからねぇよ」

私の小さな呟きはお構い無しと、婆さんはふんっと鼻を鳴らし喋り始める。

「まぁ、それが当たり前さ。誰もが産まれた時からやりたいことがあったら苦労はしないよ。それを知るために勉強をするんだ」

「知るために勉強？」

「そうさ」

そこで一呼吸置くと再び婆さんは話し出す。

「あんたは毎日グータラに過ごしてきたんだ。やりたいことなんて考えたこともなかったろうね。でもだからこそ、今は理解出来るはずだよ。ただ黙っていても、空を眺めていても、何も進まないことをね」

「……じゃあどうすればいいんだよ……」

「さっきも言ったじゃないか。まずはやりたいことが見つかるまで勉強をしてみな」

「……むぅ……」

「勉強をしておきさえすれば、やりたいことが見つかった時に必ず助けになるはずさ。やりたいことが見つかった時に後悔はしたくないだろう？だから勉強はしておきな」

「勉強……か」

釈然としないが婆さんが言うんだ。一応やれるだけやるか？　しかし勉強をしたからと言って、やりたいことが見つかるのだろうか？

いやいやいや、勉強はあくまで何かしたいことを見つけるための猶予期間であり……むぅ？　訳が分からなくなったぞ？

そう言えば、この勉強は私が独り立ちできるようになるためのものなんだよな。つまり婆さんが言うには勉強すれば何かしたいことが分かるかもしれないと言うこと。

だから勉強をしておけば、婆さんが居なくても路頭に迷わないかもしれない。この時代で生きていける。

そう言えば、この時代は知らないことばかりだ。この森が大陸のどこにあるかも知らないのだ。

「私は何も知らないんだな」

「そうさね、あんたは何も知らない。だから勉強してみてはどうだい？」

婆さんの言う通りだな。うむ、まずは勉強をしてみよう。知識や魔法を貪欲に習得して独りで生きれるように頑張ればいいじゃないか。

そうすればやりたいことも見つかるだろう。この時代で私は生きて行くことができる。

グータラに生きることは何時でも出来るしな。私はすぐに死ぬと思うけど、一年ぐらい頑張ってみるか。

願わくば、その一年の間にソイツが記憶を思い出さないことだな。

…

…

…

婆さんに礼を言った後、すぐに部屋を出た。決めたら即行動だ。やるならしっかりとやらないとな。

「エルザ、明日から私は頑張るよ」

「そ、そうか（部屋で何があったんだ？別人のようじゃないか！？）」

「あぁ、よろしく頼む」

何やら驚いているエルザはさて置き、計画書をきちんと見るか。
何をするか見ておかないとな。

何々、朝は知識系。昼は運動系。夜は薬学系と言ったところだな。

ふむ、ふむ、なるほど。

つまり自由時間は食事と風呂と寝る時だけと言うことか。

よし明日から

「やってられるかぁ！？」

こんな紙切れなんぞ、どっかに飛んでいけ！

「あっ！　私が書いた計画書を投げるな！」

てか、ハードスケジュールすぎじゃね！？　自由時間がないじゃ

ねぇか！？

「あぁ、紙に皺が。せっかく綺麗に書けていたのに……ナナシのバカ……」

「なぁ？　エルザ」

「……なんだ？……」

紙切れを拾い、少し涙目になっているエルザに……何で涙目になっているんだ。

まぁいいか。とにかく私はエルザに問い掛けた。

「どれか減らさないか？　私は何かを見つける前に過労で死んじまうよ？」

「駄目だ。絶対、計画書通りやるからな！」

「絶対？」

「絶対の絶対だ！　お前は男だろう！　一度決めたことは貫き通せ！」

「うへぇ」

明日から大変な日々が続きそうだ。うむ、辛かったら逃げることにしよう。

喪失者（後書き）

補足

ナナシは記憶喪失者とは別の存在と考えている。いや考えたいと言う話。

それと混乱しながらもポーリュシカに言われた通り勉強を頑張ろうと思い立った話。

読みにくかったですよね。混乱の描写は難しいです。

記憶関係は今回で一端収束します。

展開遅すぎますかな？

使い

私が勉強をすると決意した次の日。

既に時間は夕方である。私とエルザは森の開けた場所で休憩を取っている。地べたに座り背後にある木に寄り掛かり半日の疲れを癒やす。今日は大忙しだったからな。

早朝、気持ち良く寝ていた私はエルザに馬乗りをされて目を覚ました。腹にエルザの全体重がのしかかり破裂するかと奇声を上げたのは苦い思い出だ。

早朝は婆さんに頼まれた薬草採取をエルザに手伝って貰いながら終わらせた。それが終わると初めての勉強開始だ。

朝は知識系と言うことで、婆さんが用意した本を読み進めるのが勉強内容だ。最初から難解な話が多く頓挫しそうだった。だが、ここで救世主現れる。

そう、今日はエルザがいるのだ。そのため口頭で教えて貰いながら本を読み進めることができた。

本の内容は魔法界のあれこれ。

私もギルドには所属していないものの、一応、魔導士の端くれである。そのため魔法界をしっかりと理解していなければならないらしい。

例えば、魔法界の頂点は評議会であることや、その評議会に従わ

ないギルドなどの話だ。たぶん一人で読んでいたら分からないことが多かっただろうからエルザには感謝している。

ちなみにエルザが来るのは週に一回か二回ぐらいなので、分からないところがあったら婆さんに聞くしかない。

おおっ。そう言えば、この東の森の位置する場所が分かった。大陸西側、フィオーレ王国のマグノリアと言う街の近くにあることらしい。

これまたエルザへの質問で分かった。エルザ様々である。それにしてもフィオーレ王国は知っていたが、場所や街は知らなかったので何だがスッキリ。

それにエルザが所属するギルド、フェアリーテイルもマグノリアにあるらしい。

うむ、新事実ばっかりだ。エルザの次は勉強様々という奴であるな。

知らないことを知るのは、何だが気分が良いものだ。大変でキツいと考えていたが、意外に勉強は楽しいものであることを認識した。

それに今回は頑張ろうと意気込んでいたためか、意外と早く昼になってしまったよ。知識系の勉強は為になることばかりだ。今後も頑張ろう。

しかし、次の運動系が問題だった。内容は殆どが、その名の通り

運動ばっかりだ。ランニングや腕立てなどキツすぎる。挫折物さ！

考えてみれば私は生まれてから運動らしい運動をしていないのだ。腕立てなんか３０回が限界。走るなんてとんでもない！？

先程まで親切に勉強を教えてくれていたエルザが鬼に見えたほどだ。逆に運動系の後半、魔法練習は楽しいものであった。

やはり魔法を使うのは良い。使う度に体の活力が湧いてくる。エルザにそれを言うと不思議がっていたが、何だが魔力の巡りが良くなるのだ。

運動系は前半地獄で、後半天国だな。婆さんが設定してくれた最低限の運動とナイフの練習を終わらせたら魔法練習を多めにやってみるか？

「ナナシ。暗くなってきたから、そろそろするぞ」

もう時間か。今からエルザと模擬戦をするんだ。

「ほら、早くしないか」

何時の間にか横に立ち、手を伸ばして催促するエルザ。その手を握り立ち上がる。……柔らかい手だ……この手で扱う剣に私は負け

たのか……むぅ。

「ナナシ？」

「あ、あぁ。始めようか」

ずっと掴んでいたのかエルザは訝しげに此方を見ていた。すぐさま振り払う。

「むっ。ちょっと乱暴ではないか？」

「柔らかいお前が悪い」

「え？」

眉を寄せた顔からキョトンとし始めたエルザは置いておこう。さて、エルザとの模擬戦は勉強の一部ではない。レッスンの一部だ。

エルザが言うには私の力量では魔導士として食っていけないらしい。……失礼な奴だ……。もう一度言おう。実に失礼な奴である。

今日こそ、エルザを倒したい。過去一回は惨敗だったからな。今回は華麗に倒して撤回してもらおう。

そう気合いを入れた私は少し離れたエルザと向き合う。　エルザは虚空から剣を。私は影からナイフを取り出した。

「何故ナナシはナイフを使うんだ？不思議だ。私が考えるにコイツは……」

ん？何ぶつくさ言ってんだ？まぁいいか。それより模擬戦開始だ。一見、理性的で可愛い風貌のエルザだが、侮ってはならない。

エルザは恐ろしい女で、私の得意な接近戦で全く勝てなかったのだ。前回のように浅慮かつ本能的な反応はダメだ。

「ナナシ、それでは始めるぞ」

「あぁ」

ダメだ、ダメなんだ。分かっている。しかし、残念ながら私にはそれしかできない。だが、それでも勝ってみせよう。

「「行くぞ！」」

……

……

…

東の森にある木々が切り倒された小さな広場には二人の人が居た。エルザとナナシの二人だ。二人はお互いの手に持った剣とナイフを振り回し戦いあっている。

お互い真剣な顔をし、模擬戦と言うより実戦に近い雰囲気が辺りに立ちこめていた。何も喋らずに二人は斬り合い、辺りには剣とナイフがぶつかり合う音がするだけだ。

運動が嫌だと宣っていた割には、ナナシはよく動く。小さく軽いナイフの利点を生かし何撃もエルザへと刺し、薙ぎ、穿つ。

しかし、その全てはエルザが握っている剣によって防がれていた。ギリギリ防がれているのではない。余裕な動きで防がれているのだ。

「だぁ！何で当たらないんだ！」

剣とナイフの激突は何回も続き、状況に展開がないためナナシは苛つき始めていた。一方、エルザは沈黙を守り、ただ無言でナナシとの戦いを続ける。

エルザの目はナナシに向けられているが、ナナシの闘志溢れる目とは違い、冷めた観察する目だ。しかし勝つ意志がないわけではない。

ナナシの一手一手を見ながらも、的確に勝つために一撃ずつ斬撃をナナシへと打ち込む。そして、今までにない一直線に鋭く振り下

ろされた重い一撃がナナシを襲う。

「ぐぅ！？」

「むっ、やるな」

それをナナシは受け止めた。エルザは自身が出した斬撃をナナシが受け止めたことに感嘆の声を上げる。だが、ナナシはその一撃をナイフで受け止めるのが精一杯だったようだ。体勢を崩し掛けている。

「ふむ、防御は並か」

その体勢のまま何やら呟いたエルザは、再び素早く剣を振るった。しかし、結果は空振り。その理由はナナシが素早く後方へと下がったからだ。だが足で素早く下がったのではない。足は踝（くるぶし）まで自身の影に沈んでいる。

「影魔法か」

あまり動揺せずに、エルザはナナシの背後にある木々を見る。何時の間にか木々には、ナナシの影から飛び出た漆黒の手が絡まっていた。

「御名答」

不敵に笑うナナシは漆黒の手に引っ張られながら後方へと勢い良く下がっていく。

【影槍！】

そして離れると共にエルザの影から漆黒の槍を突き上げた。

「あまい！」

だが、エルザは分かっていたかのようにヒラリと横に避ける。

「同じ手は何度も効かないぞ！　ナナシ！」

【黒羽の鎧！】

エルザは一瞬で違う鎧に換装すると一気に踏み出す。どうやら今までのは馴らしだったようだ。たった数歩でトップスピードに乗ったエルザは、後方に土埃を巻き上げながらナナシに近付く。

一方、ナナシは

「あっ！ずりぃ！？違う鎧とかあるのかよ！？」

そう叫びながら片手を上に向けると、すぐにエルザの方向へ降ろした。

【四つ闇】

突如としてナナシの背後から、無数のどす黒い三日月型の何かが出現。何かは勢い良く回転するとナナシの合図と共にエルザへと飛び出す。

一つがエルザの振るった剣とぶつかり合い、火花を散らせる。それは影で出来た刃。鋭く何者でも切り裂きそうな刃であった。

どす黒い三日月型をした刃は縦横無尽に動きながらエルザへと迫る。

「やはり！」

一方、ナナシの魔法を見て何かを確信したエルザは影の刃を切り裂きながら喋る。

「ナナシ！一端、戦闘を止めろ！」

しかし戦闘に集中しているナナシが聞いているはずもない。エルザが影の刃に気を取られているうちに再び攻撃を仕掛ける。

【影槍】

「むっ！ナナシの奴。話を聞いてないな！」

足元から出てきた槍をギリギリで避けつつも、迫ってくる刃を相手にするエルザは苦悶の声をあげた。

…

…

…

おっ！　四つ闇と影槍を出したらエルザの動きが止まったぞ。これはいいコンボかもしれないな。よし。今のうちに接近してナイフで倒してやろう。

「昨日の雪辱晴らしてやらぁ！」

気合いを入れて地面を蹴り走り出す。もう体力が限界だ。全身が

ガクガク震えている。ナイフなんか取り落としそうだ。

でも頑張れ私！エルザは今だに佇んだままだ。エルザまで距離ゼロ！　よし、行ける行けるよ。私の接近戦をトクとみよ！くら……え？　拳が目の前

「エルぶはぁ！？」

「お前は人の話を聞けと何回言ったら分かるんだ！　馬鹿者！」

「鼻が！？　鼻がぁ！？」

…

…

…

結局、負けてしまった。鼻血が止まらないな。まぁ、今回は惜しかった。エルザを倒すまで後少しだったから……どうやら体力が続かなかったのが敗因のようだ。運動は地獄だが最低限の体力は付けよう。

「痛っ！」

「ナナシ」

「抓るな！　まだ鼻血が出てるんだよ！？」

「もう止まっている」

「あれ？　本当だ」

私が心の中で反省会をしていると、エルザが何やら話し掛けてきた。って、話し掛けてきたとか生易しい物ではない。顔を、しかも鼻を抓ってきやがった。

「てか私のプリティーフェイスになんてことを！」

「……三度の戦闘で感じだのだが……」

え？　無視？　しかも三度じゃねぇよ。二度の間違いじゃ

「お前は完全に中距離型の魔導士ではないか。何で接近戦なんてやっているんだ？」

「は？」

何だ、コイツ。また意味分からねぇこと言ってんぞ。手に持ったナイフをクルクルと回しながらエルザに問い掛ける。

「おまっ。どうみたら私が中距離タイプなんだよ。見てみろよ。こ

のナイフの上手な回し方。ナイフ使いナナシとは私のことだよ？
私は接近戦タイプの魔導士だ」
「ナイフ使いナナシ？　ポーリュシカさんが名付けたのか？」
「いんや。ちげぇよ？」
「む？　お前は昨日までポーリュシカさん以外知り合いは居ないんじゃなかったか？」
「あぁ。そうさ」
「じゃあ誰が言ったんだ？」
「私だ。　ナイフを使った接近戦は大の得意なんだ。今日は負けたけど今度は勝つからな」
「……聞くが、その接近戦が得意なのは何故だ？……」
「家に出てくる黒い奴には連戦連勝なんだ。エルザに負けたのが初めてなんだよな」
「……はぁ……」
何か溜め息吐かれた。てか何だ、その呆れた顔。
「お前は接近戦はしない方がいいぞ」

「はぁ？」

いきなり何を言うかと思えば、やれやれな奴だな。そう考え、肩をすくめていると、グイッとエルザが近付いてきた。やはり可愛い。こんな女に私は負けたのか。

「いいか？」

「な、何だよ」

「お前はナイフ使いじゃない。ナイフの使い方は素人に近く、適当に振り回しているに過ぎない。というかナイフ使いは魔導士ではないだろう」

「え？嘘だ。エルザだって剣を……」

「私のは魔法剣だ。ただの剣ではない」

わ、私のナイフだって森で拾った奴だぞ。聖なる東の森に落ちていたから何かが宿っているはずだ。……たぶん……。

てか大体、影魔法は補助系統に特化しているんだ。接近戦でナイフを使うからこそ、その補助として使えるんだ。

そのことを懇切丁寧にエルザに説明してやる。説明中、鼻から垂れてくる残りの鼻血対処はエルザがやってくれた。説明を聞き終えたエルザは私の鼻を摘みながら尋ねてくる。

「ちなみに影魔法は幾つ覚えているんだ？」

「二桁以上だな」

そう自身満々に言うと再び溜め息を吐かれた。失礼な奴だ。影魔法は使い勝手がいいんだぞ？

「いいか、ナナシ？」

「あ？何だよ」

「はっきり言おう。お前は影使いだ。それに中距離型の魔導士だ」

え？　まだ言ってんのかよ。

…

…

…

あれから数時間後、私は自宅へと帰ってきていた。そして現在は

婆さんから薬学を教えて貰っている。教えて貰っていると言っても、これまた本を読むだけだ。

だが、本を読むだけでなく、その内容を一字一句覚えないといけないらしい。薬は一つでも手順を間違えるとヤバいことになるらしい。ましてや人に与える薬は細心の注意が必要なのだと……。

まさか、夜が一番ハードだとは思いもしなかった。朝と昼で体も頭も悲鳴を上げている、休憩したい。ちなみにエルザ達は帰っ

むっ。そう言えば思い出した。エルザ曰わく、私は接近戦はダメダメらしい。ましてや補助の影魔法の方が主体だなんて言うのだから、チャンチャラ可笑しいアドバイスだったな。

私はナイフ使いナナシだ。今は勝てなくても勝てるように頑張れいいじゃな

「……あんた、薬草の種類と配合は覚えたのかい？」

「……まだ……」

「だったら早くおし！」

「ぁぃ」

その前に今日は寝れるのだろうか……。

エルザよりスパルタすぎるよ。　婆さん！

半年後

月日は経ち、私が勉強を始めて半年が経つ。

この半年の間に私は色々と成長することができた。知識は十分に蓄え、エルザよりも知識量は多くなった。

今ではエルザが『頼む。教えてくれ！』と泣きついてくるほどだ。

婆さんには、治癒魔導士として認められ、巷では治癒魔導士ナナシとして活躍。

そしてエルザとの模擬戦は全戦全勝！これまたナイフ使いナナシとして有名だ！

もう笑いが止まらないな！

ＨＡＨＡＨＡ！　ＨＡＨＡＨＡ！

ＨＡＨＡＨＡ！　ＨＡＨＡＨＡ！

……と言う夢を見た……。

テンションがた落ちだ。半年だ。半年でそんなに成長するわけがないだろう。……夢の中の私は馬鹿野郎か……。

しかし期間だけは正しかったな。確かに半年は経った。そして現

在は深夜のはず。私は自室にて薬学の勉強をしていたはずだ。

だが途中で力尽き、机に突っ伏して眠りこけていたらしい。ったく、体がバキバキだ。早く今日の勉強を終わらせて寝ることに……

え？

「嘘だろ？」

立ち上がり、体を伸ばした私の目に信じられない光景が写ったのだ。

「……窓の、窓の外が明るい……だと」

窓の外は暗闇ではなく、青く染まり始めていた。深夜ではない……早朝だ。最悪だ。最悪すぎるぞ。もう起きる時間ではないか。寝た気が全くしない。　いやまだ寝れるはずだ。後少しばかり時間は残っている。

いざ。ベッドへ。早く寝て今日の勉強に備えないと……。

……

……

……

～数十分後～

「ナナシ！朝だぞ！」

肌寒い早朝の時間。誰かの疳高い声が部屋に響き渡った。

「……ぁー？……」

そのことにより熟睡していた私の意識は無理矢理、浮上させられたのだ。

「起きろ！」

誰だよ。非常に煩いし、今の私はベッドでふかふかの布団を被り睡眠中なのだ。

「……出ていけ……」

「何だと！　お前のために朝早く来たんだぞ！」

うるさいぞ。誰かは知らないが、私のために朝っぱらから活動しているのなら、現状を見てみろ。そして何が私に取って最善か判断しろ。

「聞いているのか！」

「……出ていけ、馬鹿野郎が……」

「むっ、せっかく来てやったのに（仕方ない。また馬乗りになるか）起きろ！バカナナシ！」

「……起きねぇよ。馬鹿やぐぇぇ！？　な、何だ！？　敵か！？」

「ようやく起きたか」

「って、あれ？え、エルザ？なして？」

どういうことだ！？

気持ち良く寝ていたはずの私の上には何時の間にか、魔獣エルザンが馬乗りになっていた……。そ、そんなことは有り得ないはずだ。

今週分のレッスンは終わったはずだ。つまり来週まで、エルザはこの森には来ないはずである。

むっ、なるほど。答えがわかったぞ。つまり、つまりだ。

「……夢か……」

何とも不思議な夢だな。腹の上に跨るエルザの温かい感触まで表現されているとは……。

「夢じゃない！　起きろ！」

ふむ、それにしても女と言うのは、どうしてこんなに柔らかいのだろうか。実に不思議な生き物だな。いや柔らかいと言う表現では表せない。やわやわだ。そう、やわや「起きろ！」

「あぶんっ！？」

ぐぉぉお！？　ビンタの感触まで再現されているだとぉ！？

「まだ起きないか。往復ならどうだ？」

夢にしてはやりす「あぶぶぶっ！？何すんだ！痛ぇだろうが！」

「ふぅ、やっと起きたようだな」

…

…

…

夢じゃない。夢じゃなかったんだ。

今の私は鎧を着けていない普段着のエルザに馬乗りにされている。そして両頬がこれでもか！　と言うぐらいに、真っ赤になっている状況だと思う。

「おはよう、エルザ」

「あぁ、おはよう。きちんと挨拶出来るようになったな。感心感心」

「……でも頬が痛い……」

「起きなかったお前が悪い」

「もうちょっと穏便に起こしてくれよ」

「それにしても部屋が汚すぎる。一昨日、掃除したのに何でこんなに散らかっているんだ？」

え？　無視された？　てか……今日は黒か。うむぅ。

「エルザよ。毎回、人の腹に乗るのは止めろよ。それに見えてるぞ。恥ずかしくないのか？」

「お前に見られても恥ずかしくもなんともない」

「ｏｈ」

ひ、ひでぇ。これでも私は男だぞ。　もう少し恥じらいを持った方がいいのではないか……。

「そんなことより、この部屋の状況はなんだ！」

馬乗りになったエルザは、そのままの格好で尋ねてくる。エルザが言う部屋の状況とは、この自室のことだ。

現在、部屋の状況は薬学の本や薬草がいたるところに散らかっている状況だ。足を踏む場所は……探せば見つかる。

うむ、何時もと変わらないな。どこが汚いのか分かるが片付けはめんどくさい。てか最近は

「婆さんの薬学が忙しいから片付ける暇なんてないんだよ」

「むっ、また言い訳をして！」

「言い訳じゃねぇよ！？本当のことだ！」

そう、本当に忙しい。今の私は毎日が忙しいのだ。最近は勉強の途中に寝ることなんてザラだ。今日も何時の間にかベッドに入っていた。本当に不思議である。

さて、エルザのレッスンと婆さんの教育が始まって半年が過ぎている。ここ数ヶ月で私の生活スタイルはがらりと変わってしまったのだ。

早朝の睡眠が薬草採取に。朝の森林浴が、青空教室に。昼のベッドでゴロゴロが、大地で汗水流す運動に。はたまた夜の瞑想時間が薬学の勉強時間に変わった。

エルザと出会ってからの毎日は大忙しだ。いや大忙しと言う言葉を越えていると思う。食事や風呂、寝る時以外は勉強ばっかりで、私は数ヶ月前のグータラな生活が恋しくてしょうがない。

だが、まぁ勉強すること事態は意外に楽しいものであった。特に朝の知識系は面白い。最近は知識量も増えてきて本をスラスラと読めるのだ。それに運動の方もなかなか好調だ。

婆さんが設定してくれた最低限の体力作りは出来るようになった。一キロのランニングなんて楽勝だ！　だが二キロはまだ無理だな。その後のナイフの練習と魔法の練習もしっかりやっている。

しかし、しかしだ。残念ながらエルザとの模擬戦では勝つことが出来ていない。だが、まだ半年だ。何時かエルザに勝てるように頑張らねばな。

ちなみに影魔法はかなり連度が上がった。補助のくせにナイフ術

より上手く扱えるとは……。それもエルザから見たら異常な成長を遂げているらしく

『接近戦を止めろ！馬鹿者！影魔法だけ使え！』

と、エルザが怒鳴ってくるのだが、魔法は補助なんだ。私はナイフの練習を頑張ろう。

エルザのレッスンで友も増えたし、勉強自体は楽しい。毎日が充実している。しかし夜が最悪だ。婆さんの薬学が大変なのだ。

おっと言い直そう。

エルザのレッスンと朝と昼の勉強は楽しい。半日は充実している。だが薬学が辛いのだ。

薬学は薬草の種類、配合など色々と覚えることある。それに最近は、薬を自分で作っている。だが、作った薬は自分の体を使って実験をするため、体調が悪くなることもしばしば。

婆さんはエルザ以上に鬼畜だったのだ。毎日、課題も出る。もう大変すぎる。これらが適度な勉強時間だったら楽しく興味深々に出来たのだが……変更はしてくれない。

つまりだ。

「毎日が、特に夜が忙しいから片付けなんて無理だ……」

「本当に勉強はやっているのか？片付けをサボりたいから言っているのではないか？」

「やってるだろうが！毎日大変なんだぞ！」

「皆、大変なんだ。お前だけが忙しいんじゃない」

そう言うと馬乗りになっているエルザは体を傾かせ、私の胸に手をつく。そして呆れた顔から少し微笑んだ顔、つまり可愛らしい顔をグイッと近付けてきた。

「何時も言っているだろう。私も頑張っているんだ。ナナシだって頑張れ」

「……わかっているよ……お前は何時も手厳しいな」

「それぐらい言わないと理解しないだろうからな」

「むぅ」

エルザの言う通りだな。愚痴を言うのは、もう止めにしよう。エルザだって頑張って強くなっているのだ。私も愚痴を言う暇があったら頑張ろう。

と、毎回エルザの顔を見ると考えてしまう。コイツといると、また頑張ろうと言う気持ちになるのは不思議だ。

それにこの半年で、私はやりたいことが見つかったような気がする。

毎日勉強して、時々エルザと模擬戦や、エルザ達同世代の奴らと会話したりと充実した毎日を送っていた私は、やりたいことが見つかったのだ。

それは些細なもので、ただ充実した毎日を送りたい……というものだ。本も読みたいし、魔法も使いたい。ご飯も食べたい。強くもなりたい。つまり何でもやりたいのだ。まぁ大変でキツイのは嫌だが……。

しかしなぁ、充実した毎日とは曖昧すぎる。まだまだ半年しか経っていないからな。もっと色々と考えてみよう。

「それより時間だ。早く行かねばポーリュシカさんに怒られるぞ」

私から離れたエルザは床に落ちている本を一カ所に積み上げながら、言葉を紡ぐ。

「ほら、早く起きないか。朝ご飯を食べたら片付けをするぞ。その後は薬草採取を手伝ってやる」

「へいへい」

既に意識は覚醒しているため、すぐさま起き上がる。薬草採取は手伝って貰わなくてもいいが、エルザといると和むから問題ない。

それにしても、何だが子供扱いされているようで釈然としないぞ。てかそんなことより

「何でいんだよ。今日から仕事があるんじゃなかったのか？」

「何だ？　来てはいけなかったか？」

「いや、来るのはいいが……仕事の準備はいいのか？」

「仕事先はここなんだ」

「ここ？」

「お前を街に連れて行く」

「何！？　ついに街デビューか！？」

おおっ！　だからエルザが居たのか！

「あぁ、私も覚悟をしないとな」

ん？　何で疲れたような顔をするんだ？取り敢えず頭を撫でておこう。

「撫でるな！」

……怒られてしまった……。　まぁいいか。このまま撫でておこう。それにしても街に行けるのか。いやぁ興奮物だ♪

なんせ私は街に、いや人里に降りたことは一度もないのだ。婆さんから止められていたからな。

しかし、つい最近、エルザの付き添いが条件で婆さんから許可が降りた。何時になるか楽しみに待っていたのだが、まさか今日だとは……。

しかし嬉しいぞ。これでナツ達にも会いに行けるじゃないか。今まではあっちから来るだけだったからな。よし、婆さんから小遣いをたっぷり貰ってマグノリアに突入してやる！

マグノリア

空は雲一つなく陽光が澄んで、すがすがしい昼間。

マグノリアの街は昼間であることもあり、活気に溢れている。特に商業区は多くの人が行き交い活気に溢れていた。

通りには様々な店がある。どの店も綺麗に手入れされており、何軒かの店では客が入って賑やかに買い物をしている。

そんな一つの店から真新しい漆黒のスーツを着たナナシとエルザが出て来た。

「背広の新調をしなきゃならんかったのか。道理で婆さんが街へ行くことを許可したわけだな」

店から出たナナシは通りを歩きながら、自身のスーツを触る。

「お前も身長が伸びたからな。そろそろ換え時だったんだ。丁度よかったではないか」

「エルザは抜いたからな。全く持って自分の成長期が恐ろしいぜ」

ナナシは不敵に笑いながら左手をエルザの頭と自分の頭を行き来させた。一方、エルザはむっと、ふてくされた表情に変わる。

「ちょっとではないか。まだ私が負けたわけではない！」

「無理無理、私はドンドン伸びるからな～」

「むっ！」

この半年で身長が伸びたナナシは遂にエルザを抜いていた。今日のマグノリアデビューは新調したスーツの受け取りのためであった。真新しいスーツを着たナナシは嬉しそうに街を見渡す。

「それにしても街は色んな物があって面白いな。見ろよ、人がわんさかいるよ！」

「そうだな。それに今日は仕事が休みの人も多いから普段より多い」

「おぉ。なるほどなぁ」

ナナシはキョロキョロと辺りを見回しながら歩く。一方、エルザはハラハラとした面持ちでナナシの袖を掴んでいた。

家を出る直前、ポーリュシカにナナシを一人にしないよう、口を酸っぱくして言われていたのだ。エルザはポーリュシカに言われずとも、ナナシを一人にするつもりはなかった。

「楽しいのは分かる。でもいいか。ナナシ？」

「ん？何だ？」

「頼むから今度は居なくなるなよ？」

一人にさせるつもりはなかった。だがナナシは、既に一度エルザの前から姿を消していたのだ。「大丈夫だ。私を誰だと思っている？」

「……だから信用ならないんだ……」

ナナシが消えたのは到着してすぐの朝のこと。エルザが街の様子を眺めている時。朝早くナナシを迎えに行ったエルザは一瞬、眠気に襲われ欠伸をした。

だが、その欠伸がいけなかった。何故なら欠伸を終えたエルザが、ふと横を見た時にはナナシは居なかったからだ。

『馬鹿者がぁ！？』

エルザは必死に走った。ナナシを探しに。そして懸命に探し見つけた時には既に昼。賞金付きの大食い店から満足そうな顔をしたナナシが出てきた所を確保したのだ。

『ちょっと金が欲しぐふぅ！？』

『探したんだぞ！この馬鹿者！』

『や、やめっ！？』

店から出て来たところを取り押さえたエルザは、ナナシをしこたま殴ったそうな。

「次は絶対にエルザから離れない。約束しよう！」

「……はぁ……信用できん」

時刻は昼過ぎ。ナナシの街デビューは始まったばかりだ。

……

……

……

ナナシとエルザの二人は街の通りを並んで歩く。

エルザはナナシの袖を掴んでおり、肩が当たる距離まで近付き歩いている。端から見れば仲の良い子供達だ。実際はナナシが逃げないように握っていると言う真実があるのだが、口にしない限りそうは見えないだろう。

そんな二人は街の人々に微笑ましく、はたまた小さいカップルとして憎たらしげに見られながら歩いていた。街の風景を嬉しそうにキョロキョロと見るナナシ。そのナナシを見ながらエルザはふと気付く。

「そう言えば髪も結構伸びたな。結ばないのか？」

「髪？」

話し掛けられたナナシは街を見るのを止め、エルザに目を合わせる。一方、エルザはナナシの長く純白に光る髪を撫でる。

「あぁ、そうだ。結構伸びてきたからな。切るか結ぶかした方が良くないか？」

「確かになぁ」

そう言うナナシは深く考えてないように気のない返事をして自身の髪を前髪を触る。この半年の時間にナナシの髪は背中の中間辺りまで伸びており、無造作に下ろされていた。

「短く切るならいい場所を教えてやるぞ？」

「いや切りはしねぇよ」

即答したナナシは端正に整った顔と涼しげな眼に似付かわしくないニヤリとした笑みを浮かべる。

「エルザ知ってるか？　髪には魔力が宿るんだそうだ」

「ほぅ、初耳だ。誰から聞いたんだ？　ポーリュシカさんか？」

「いんや。東洋の神秘という本だ。東洋は凄いんだぞ！　色々と勉強になることが多くてな」

そう誇らしげに頷くナナシは何かを思うように目を閉じ始めた。そんなナナシを見てジト目のエルザは溜め息を吐く。

「……また眉唾ものの本を読んだな……」

「東洋は素晴らしいんだ！」

「ふむ、髪を切らないなら結んだ方が良いだろう。髪留めを買いに行くか。次は左だぞ、ナナシ」

「それにな、東洋には忍者と言うナイフ使いが居てな……」

「またコイツは話を聞いてないのか」

ナナシの様子を見たエルザは拉致が飽かないと考え、袖を引っ張り歩く。

「忍者ナイフの名前がクナイとか言う物で……」

「それなら魔法剣の一つにあるぞ。珍しくもなんでもない」

「なんと！？」

「……私の声が聞こえているだと……お前の耳はどうなっているんだ！」

エルザは袖ではなく、ナナシの耳を引っ張り歩く。

「痛い痛い痛い！？」

それから数十分後。

辺りは人の手で整えられた木々が並んでいる。木々の間には石畳の大通りが広がっていた。その横には石造りや木製の建物が出来ている。その建物の一つにエルザとナナシがいた。

ナナシは先程の無造作に下ろした髪ではなく、銀筒の髪留めで結んでいる。首筋から一本の白髪が垂れ尻尾のようだ。

ただ後ろ髪だけを結んでおり、耳を覆い隠し肩まで垂れている横髪は、そのままだ。さて、そんな二人がいる建物はマグノリアに複数ある魔法具屋の一つである。

先程、エルザにクナイのことを聞いたナナシが髪留めを購入した後、行きたいと縋ったのだ。

「おや、エルザちゃん。デートかい？」

「いえ、子守です」

「ｏｈ」

そこはエルザ行きつけ店である。若い男性店主と仲良く喋るエルザ。その横には子守と言う言葉に衝撃を受け、よよよとへたり込んでいるナナシの姿があった。

「むっ！」

しかし、何かに気付いたナナシは、すぐに気を取り戻し立ち上がると店主に詰め寄る。

「それより店主。クナイとやらを出せよ？」

ナナシは詰め寄った。左手に鈍色に光るナイフを握りながら。

「ちょっ！？」

「おらクソ店主？　早く出さねぇと首と胴が離あぶんっ！？」

「ナイフを持ったまま人に近付くな！」

…

…

…

現在、私は怒られている。ただ怒られているのではない。正座だ。

「いいか！あれほど人前でナイフを出すなと言っていただろう！」

「……前にエルザは良いって言ったじゃねぇか」

「あれは悪人にだけだ！」

悪人とか判別つかねぇよ。私にとったら知り合い以外悪人に見え

るな。特に店主野郎は真っ黒だ！

「ちゃんと聞いているのか？」

怒鳴り声を上げるエルザには飽き飽きだ。別にいいじゃないか。私はクナイを見たかったのだ。まぁ先程、店主野郎が見せてくれたがな。しかし残念なことにクナイには全然惹かれなかった。つまらない。

それなのに、この説教だ。余計つまらない。婆さんに貰った小遣いも増やしたし、魔導書でも買いに行くとするか。

「まぁまぁエルザちゃん。僕は大丈夫だから」

「本当にすまない」

ふん、エルザは店主野郎なんかと、仲良く忙しいようだから勝手にさせてもらおう。さて影に潜って移動開始だ。

【転影移】

店主野郎と目が合ったので一睨みしながら影へぐぷりと沈んだ。店主野郎は震えてやがったな。何かムカつく。今度会ったらシメテやる。

そう考えながら、適当に別の影に転移すると勢い良く飛び出す。

「きゃっ！？」

「あ？」

誰かの影から飛び出したようだな。場所は大通りか。

「だ、誰？って嘘！？　ナナシじゃない！？」

私の名前を知っているだと？その声に私が振り返ると驚いて目を見開いている女がいた。

「何だ……カナか」

「何だはこっちよ！　いきなりビックリしたんだから！」

「そうかい、そうかい」

私の目の前にいる女は、カナ・アルベローナ。

茶色の髪を一結びにし、ポニーテールにして、オレンジを基調としたワンピースを着た女だ。私より年下の１１歳である。フェアリ

ーテイルの魔導士である。

カナと出会ったのはエルザのレッスンの一環だ。友を増やした方がいいとのことでエルザが森に連れて来たのだ。

他にはナツやグレイとも友になっている。アイツラは、なかなかに騒がしい奴らなんだよなぁ。

「てか、森から出てきていいの？　ポーリュシカさんに怒られるんじゃ……」

「今日は街デビューなんだ。では私は行くぞ」

驚いているカナは差し置いて歩く。さっさと魔導書を買いに行こう。エルザなんか店主野郎と仲良くやってりゃいいんだ。私の知ったことではない。

「あっ！　ちょっと待ってよ！」

オープン

時間は昼過ぎ。

商業区には数十にも及ぶ食事処があり、多くの来訪者により賑わっていた。

とあるカフェでは多くの者が建物に入り、食事をしている。だが、少数の者は外に設置してあるテーブルで、通りの賑わいを見ながら食事をしているようだ。

曰わくオープンカフェといったところか。席は殆どが埋め尽くされており、店員が忙しなく働いている。

そんな繁盛しているオープンカフェの一つにナナシとカナの二人が居た。出会ってから、すぐに魔法具屋に向かっていたナナシが、カナに無理矢理引っ張られてきたのだ。

「よくもまぁ、そんなにいっぱい食べれるわね」

オレンジを基調としたワンピースに身を包んだ少女カナが、テーブルに広げられた料理を見ながら唸る。二人が居る木製のテーブルには、大人でも食べきれるとは思えないような大量のクリームパスタが置いてあった。

五人前以上あり、隣に座る客や通りかかった客がテーブルを二度見、三度見して唖然とした程の量だ。それをナナシは一人で食して

いた。カナは胸やけがすると言い、ジュースをストローで啜るだけ。

「ん？　オヤツだし、普通はこれぐらいじゃないか？」

「全然、普通じゃない。それにオヤツじゃなくてご飯になってるから」

「そうか？　オヤツだから我慢して少なめなんだが……」

「この量で少なめ！？　何時も思うけど、見るだけでお腹いっぱいね。どこにそんだけ入るか不思議でたまらないわ」

「……いや、お前もな……」

ナナシはポーリュシカに仕込まれたであろう作法で、器用にフォークとスプーンを使い、パスタを食す。その一方で、カナに呆れた視線をぶつけていた。

「何よ？私に何かついてる？髪はさっきセットしたばかりだし……」

ナナシの視線が気になったカナは、キョロキョロとおかしいところがないか探し出す。だが、いつも通りであることを確認すると、ほっと胸を撫で下ろし、再び視線をナナシに戻した。

「私って、どこか変？」

「お前……ジュースの樽飲みって初めて見たぞ？　普通じゃないだろうが」

「何だそんなことだったの。これくらい普通よ普通。私にとったら、ナナシの方こそ有り得ないわ」

「いやいやいや」

そう、カナはジュースを樽飲みしている。テーブルに載せきれなかったため地面に置かれた樽から長いストローが伸び、それを啜っているのだ。

これまた通りかかった人達が二度見、三度見した理由だ。小さな子供達が馬鹿食い、馬鹿飲みをしているのだから。

「「私より絶対変！」」

そう言いながら、食す二人を見て

（……どっちも変だから……）

そう、隣にいた客が心で呟いたそうな。

「ナナシは街に来たのが、初めてだから常識を知らないんだよ」
「しかし本で樽飲みとか読んだことがないぞ」
「本は現実とは違うんだよ？」
「そうなのか？」
「もっとナナシは勉強しないとね。今日は勉強になってよかったわね」
「むぅ。樽飲みは当たり前か」
「そうよ。だから今日はナナシの奢りね。レディに失礼なことを言ったんだから」
「それも常識なのか？」
「常識よ♪　レディファーストって言うの。ご飯やケーキとか一緒に食べるときは、男が女に奢ってあげるんだよ」
「レディファーストねぇ。街って大変なんだな。わぁったよ。今回は私の奢りだ」
「やったね♪そうだ。お礼に良いこと教えてあげる。週サラって読んだことある？」
「あーあれかぁ」

週サラ。週刊ソーサラーと言う雑誌の略称だ。ちなみに週刊ソーサラーとは、魔導士達のための情報雑誌である。魔法界に関する様々なことが書かれており、ナナシも愛読している。

「週サラーだろ。あれって表紙ないよな。雑誌なのに不思議に思ってたんだよな」

「表紙？」

「そうそう。いきなり目次とか無しに文章とかが入ってだろ。エルザに聞いてもそれが普通だっていうし……」

「ん？　表紙ならあるじゃん。グラビア写真だけど」

「へ？　ぐらびあ？　何の話だ？」

「週サラの話でしょ？」

「あぁ」

「何か話が繋がらないね……」

どちらがおかしいか明白だが、話が繋がらないため、カナは話を換え始めた。

「週サラは置いといて。それより今日はエルザと一緒じゃないの？街に行くには同行が条件じゃなかった？」

こてんと首を可愛らしく傾けたカナは、ストローを銜えたまま尋ねた。

「……よく覚えていたな……」

「そりゃ、ナナシが嬉しそうに何度も話せば嫌でも覚えちゃうよ。今は嬉しくなさそうだけど、街は気に入らなかった？」

「いや、まぁ気に入っては……」

「それに半年経ったらフェアリーテイルに入るんでしょ？」

「……まだ考え中だ。やりたいことも見つかってないしな」

「入ってから考えればいいのに……。フェアリーテイルもマグノリアも良い所だよ。ナナシにも気に入って欲しいな。それに入ったら、何時も一緒にいれるんだよ？」

「……考えとくよ……」

カナが嬉しそうに答えた後、ナナシは眉を寄せて深く思考する顔をした。しかし、それもカナの声によって中断させられる。

「それよりエルザは？」

「エルザは魔法具屋の店主野郎と仲良く忙しかったようだからな。置いてきた」

「ぁ～あんた達、また喧嘩したね」

「ちげぇよ！」

「それもそっか。違うよね。何時もナナシが殴られて終わりだもんね。じゃあ、何でエルザから離れたの？」

「殴られて終わりとか失礼な奴だな。てか、さっきも言ったぞ。エルザが店主野郎と」

「もしかして、また嫉妬？」

「はぁ？それこそちげぇよ」

「はいはい、またなの？　本当に子どもなんだから」

「だから、ちげぇって！」

ナナシのムキになった言葉に、カナは僅かに口の端を上げると、ニヤニヤと笑った。

「大体、エルザが……」

そして反論するでも意見を差し挟むでもなく、ただナナシの愚痴

話を聞いてのであった。しかしナナシの愚痴が一通り終わると、既にカナの顔は笑っていなく、心配そうな表情をしていた。

「また勝手に逃げてきたのね。エルザに怒られるよ？怒られる前に謝った方がいいんじゃない？」

「何でだよ。私は何も悪くない」

「さっき離れないって約束したんでしょ？」

「……むぅ……」

「エルザも朝早く起きて頑張ってたんじゃないの？」

カナが当惑した表情でナナシを見る。だがナナシは、もう喋ることはないと言わんばかりに、黙々とパスタを口にかき込んで無視し始めた。

「……全く……」

何度話し掛けても話そうとしないため、カナは頬杖を付いてナナシが食べ終わるのを見守っていた。一通り食事が終わるとカナが話を切り出す。

「エルザの話じゃなくて、私のお願いだから聞いてくれる？」

「……何だよ」

「暇なら買い物付き合ってよ。来週、皆でクエストに行く予定なんだ」

「クエスト？あぁ、ギルドの仕事か。皆ってナツ達とか？」

「そうよ。皆でハコベ山にバルカン狩りに行くんだ」

「バルカン！？」

「そうよ！凄いでしょ！討伐クエストだよ！」

「ありゃ、凶悪モンスターだぞ。あぶねぇだろ」

「マスターが皆で行くなら良いって許可くれたんだ♪　五匹倒すんだ。五匹！」

カナは嬉しそうに語るが、ナナシは眉を寄せて思案顔だ。

凶悪モンスター、バルカン。ハコベ山に生息する大猿の形をしたモンスターだ。

「ありゃ危険な奴なんだぞ、人をな……」

「それは知ってるよ。でも大丈夫。ナツ、グレイ、エルザと一緒に行くんだから♪」

「それにお前もだ。ナナシ」

「むぅ。そうか。ナツとグレイとエルザ。それにカナと私か。なら大丈……え？」

ふと、ナナシの背後から聞き覚えのある声が聞こえた。ただ背後にいるだけなのに、威圧を感じ、ナナシの背を冷たい汗がドッと伝った。

ギギギと音が鳴りそうなぐらいぎこちなくナナシが振り返ると、そこには

「探したぞ。ナナシ。こんなところでカナと仲良く、で、デートか。か、覚悟は出来ているのだろうな？」

こめかみをピクピクと動かしながら、無表情で睨みつけてくるエルザだった。

「……ごめんな……」

その顔を見た瞬間、ナナシの顔に苦々しい表情が広がり、すぐに謝ったが

「許さないからな♪」

時すでに遅し。にっこりと笑いもせずに声のトーンを上げたエルザに、ナナシは首根っこを力強く掴まれてしまった。

「カナ！　助けて！？」

「またカナか！？　お前はそんなに私と居るのが嫌なのか！」

「ち、違っ！？　あ、あれはお前が店主野郎と……」

「言い訳はしなくていい！」

二人はそう言い争いながら路地裏へと消えていったそうな。

「あ～ぁ」

対してカナは席に座りジュースを啜っており、時折聞こえる悲鳴に、ほれ見たことかと溜め息を吐く。そして一部始終を見ることも、ナナシを助けることもなかったのである。

……

……

…

オープンカフェにて。

「何だ、またナナシの嫉妬だったのか」

「違っ！？」

「私やナツ達の時も凄かったもんね。ボロボロになったもん……ナナシが……」

「ナツ達に接近戦を挑むからだ」

「ちょっ！？私の話を」

「嫉妬なら、そう言えば私もレッスンしなかったのに……」

「しょうがないよ。ナナシはへたれだから」

二人とも聞いてくれないや。てかカナよ。へたれってなんだ！？酷くないか……。

「それより私も走り回ってお腹が空いたな。ナナシ、ウェイターを呼んできてくれ」「ＯＫ！　今すぐ、呼んでくる！」

「完全に心が折れてる」

カナの奴、何言ってんだ？エルザ様の言うことは聞かなくちゃいけないんだ。常識だろ。さてウェイターはどこにいるのかな。

あ、いたいた。ＨＥＹ！ウェイター！

…

…

…

さて、エルザ様もお食事を終わられたことだし

「エルザ様、バルカン狩りは危険じゃねぇか？」

「あぁ、様は付けなくていい」

「へい！」

「……へたれ……」

またカナか。そんなジト目で見るなよ。何だか恥ずかしいじゃないか。てか、そんなことよりバルカンだ。

「部外者の私が口を出すのもなんだが、危ないだろ？」

「それに関しては注意すれば大事に至らないだろう。私は既に討伐経験済みだからな。それに今回はナツ達の同行みたいなものだ」

なるほど。さすがはエルザだな。既に経験済みとは……。本当にコイツは12歳の女か？

「てか、何で私も連れて行くんだ？流石にバルカン狩りはなぁ」

「森バルカンは何回か狩っているのだろう？」

「まぁ二回ぐらいな」

森バルカンとはハコベ山ではなく、東の森に多数生息しているバルカンのことだ。

アイツらは倒すのに一苦労なんだが、ナイフの練習や魔法の練習にバッチリなんだ。特にナイフの練習は相手が必要だからな。

「嘘っ！？　ナナシ、バルカン倒せるの！？」

「あ？　いや、二回だけだ。しかも補助の魔法で倒したのであって、私としては倒した気はしないんだがな」

「魔法で倒せば十分だ。大体、お前は魔法だけを使えと何度言った

ら分かるんだ」
「魔法は補助なんだ！」
「体力がないくせに接近戦を挑むお前は馬鹿だ」
「ぐっ」
「……ナナシがバルカン倒せるとか信じられない……」
エルザは何時も人の弱いところを突いてくるから嫌いだ！　てか、カナは何で驚いているんだ？
「それよりハコベ山のは、こっちのよりレベルが高いと聞いたが？」
「だからお前を同行させるんだ。経験すれば強くなれる」
「むっ。確かに……」
「ただし、ナイフは使わせないからな」
「えぇー」
「接近戦で森バルカンは倒したことはないのだろう？」
「そりゃ……ある！あるに決まっている！」

「「嘘か」」

そうさ。私は接近戦でバルカンを倒したことはない！……自慢にならねぇ……。それにしても、何でコイツらには、すぐにバレるんだろう。誰か私の嘘が通じる相手は居ないだろうか。

「何でバレたんだ？」

「あんた、さっき、自分で言ってたじゃない」

「……あ……」

くぅ、女に言い負かされるとは。もっと修行して嘘を吐くのを上手になって、カナ達をぎゃふんと言わせてやる。

よし、その件はそれでいいとして、今回のバルカン狩りに同行させると言うならば、私の練習相手にさせてもらおう。エルザから離れれば、ナイフを使っても問題はあるまい。って、そう言えば

「カナは買い物に行かなくてもいいのか？　私も魔導書買うだけだから付き合ってもいいぞ？」

「ホント！？」

「何？カナとだと……」

ふと、思い出したことを尋ねる。カナは嬉しそうに笑い、エルザは不機嫌な顔をしている。何でだ？買い物の手伝いだぞ？そろそろ時間も遅くなってきたからな。

今日は魔導書と……カナが何やら言っていた【ぐらびあ】付きの週サラーを買うだけで終わりだろう。来週はバルカン狩りだと言うし、準備が必要だ。ナイフを研いでおかないとな。

「本当に付き合ってくれるの？」

「あぁ、もち」

「やったね♪　荷物持ちゲット♪　ハコベ山は極寒の地だからね。コートとか買いたかったんだ」

「ちょっ、手を引っ張るな！あと流石にコートは奢らないぞ」

「別にいいよ。ほらほら行こうよ♪」

ワクワクしながら、私の手を取って先に行こうとするカナ。手がやわやわだ。やっぱり女の体は柔らけぇな。抱き締めたら、どんだけ柔らかいのだろうか。

「やわやわで最高だ」

「あんたは相変わらず、柔らかいの好きね」

「いやぁ、何か落ち着くんだよ。そう言えば、森バルカンの毛並みも柔らけぇんだよな。やわやわで、もふもふしてるんだ」

「うわぁ、私の手はバルカンと同等とか引くわ。何か変態っぽいよ」

「……ナナシがカナに取られた……」

柔らかいのなら変態で結構だ。やわやわは天国である。そう幸せに浸って歩き始めたが、エルザが着いて来ないな。俯いているが、どうしたんだ？　そう思考し近付いた時、私の腕をエルザに引っ張られた。

「ま、待て」

「どした？　買い物行かないのか？　一緒に行こうぜ。エルザも居なきゃ楽しくない」

「か、買い物は行くに決まっているだろう！　お、お前を一人にしたらダメだからな。こ、これなら離れることはできないぞ！」

そう言い、服ではなく手をギュッと握り締めてきた。マジで！？
両手とも、やわやわとか、どんだけ幸せなんだよ！？　コイツぁ、森バルカンの毛並みより柔らかいよ。

…

…

…

「ほら、行くぞ」

「柔らけぇ」

エルザとカナはナナシの手を引っ張って通りを歩く。3人が通りを進むに連れて、辺りは色とりどりな店が増えていった。それらを嬉しそうに見るナナシは、エルザとカナを両手に花状態で街を歩いたそうな。

その後、何とか魔導書と週刊ソーサラーを手に入れたナナシは

「こ、これが、ぐらびあとな！？　破廉恥な！　ボインボインではないか！？」

新たな道へと踏み出していた。少年魔導士は大人への……いや、

変態への階段を登り始めた。

思い

マグノリアデビューから一週間経つ。現在は昼過ぎで森の中にいる。

この一週間、朝は週サラーばっかり眺め……いや読んでいた。いやぁ、週サラーは最高の雑誌だったんだ。あれを読む度に力が湧いてくる。

「ぐふふ」

……おっと変な声が出ていた。さて、週サラーは家に帰ってから読むとしよう。

明日はエルザ達とバルカン狩りに赴く予定。その場所であるハコベ山には凶悪モンスターがウジャウジャいるらしい。

そのため、昨日はエルザから魔法だけを使うように散々怒られた。理不尽だ。何もしていないのに怒られたのだ。

エルザ曰わく、

『お前には言い聞かせておかないと大変だからな』

だそうだ。

失礼な奴だ。私だって私なりに色々と考えているんだ。接近戦ではナツ達にも勝てなかったからな。練習が必要だなんてことは分かっているんだ。

今だって……。

「ウホッ！　人間の子供だ！」

森バルカンを相手にナイフの練習を頑張っているんだ。

「ウホホ～！」

森バルカン。東の森に生息する魔物で緑色の体毛に被われた大猿だ。今回、私の目の前にいる森バルカンは2メートル弱の大きさだが、倍近い森バルカンも生息している。

さて、それより戦闘開始だ。私は影から取り出したナイフを握り締めながらバルカンと対峙する。戦闘準備は万端。後はコイツを倒すだけだ。ただし倒せないような状況になったら、即、退却だ。

「ウホッ。子供子供！」

気持ち悪い笑みを浮かべた森バルカンが地を蹴り、勢い良く私に迫る。接近すると森バルカンは、すぐに緑色の長い手を振り回す。それを後方に回避しながら木々が覆い茂る場所へ誘導する。

徐々に狭い森の中で行われる戦闘のため、攻撃は、木に叩き付けられるだけだけになってきた。よしよし、作戦通りだ。今回は身動きが取れないようにして、攻撃するのが目的だからな。

それにしても、この森バルカンは体格に添わず力が弱いようだ。攻撃をした木々は揺れて葉を落とすだけで折れたりはしていない。

コイツはひょっとしてナイフだけで倒せるかもしれないな！　と考えていた私が馬鹿だった。森バルカンが、何やら地面を探し始めたと思ったら、そ腐り朽ちていた大木を拾い上げ叩きつけ始めたのだ。

「ウホォォ！！」

「げぇ」

まさか、武器を持つ知恵があったとは知らなかったぞ。イレギュラーは怖い。一通り、狭い場所まで誘導して本格的に退却を開始しよう。

しかし、攻撃せずに退却するのは勿体ないな。一撃入れてから退却するか。そう考え、ナイフを握り直す。今だに木を振り下ろしてくるバルカンの懐に飛び込み切りかかろうとした。

次の瞬間、轟と風が唸った。

それと共に私の目の前が遮られ、何かがぶつかり合う音が辺りに響く。

「おっかねぇな。子供にこんなもん振り回してんじゃねぇよ」

視界を遮ったのは人間だ。茶髪の髪をした黒ロングコートの人間。背しか見えないため誰かは分からない。低い声のため男だろう。

誰かは知らないが邪魔しやがって。チャンスを逃がしたな。だが好都合でもある。今のうちに退却させてもらおう。それではな。知らない人間よ。

影に潜り適当に転移する。

ふぅ。今回は危なかった。まさか森バルカンが武器を使用してくるとは……勉強になったな。うんうん。次の戦闘時に役立てよう。

「ナナシじゃねぇか！」

「ん？」

歩きながら反省会をしていた私に誰かが呼び掛けてきた。桜色のつんつん頭に、ウロコのようなマフラーを身に付けた少年だ。てか

「何だ、ナツか」

「何してんだ？　また勉強か？」

「まぁ、そんなもんだ」

正面から元気よく走り寄ってきたナツは、嬉しそうに笑っているが、何か良いことでもあったのか？

はっ！？　分かったぞ！

「お前も今週号の週サラーを読んだんだろ。あの子可愛かったよな～」

「しゅうさらー？　何のことだ？」

「は？　お前、週サラーを知らないのか！？」

「何だそれ。知らねぇよ」

はぁぁあ！？　コイツは馬鹿野郎か！？　魔導士のくせに何で知らないんだ。芸術作品が、あの安さで読めるのだぞ！

「待っていろ。今すぐお前にあの素晴らしさを見せて……あれ？」

影の中から週サラーを取り出そうとしたが、出てくることはなかった。

はて？……あっ。思い出したぞ。自室に置きっぱなしではないか。よし、今からナツを連れて行って、ぐらびあの素晴らしさを教えてやる。

「おい、ナツ！　今からウチで週サラーを読ませてやる！」

「興味ねぇわ」

え？

「それよりさ！　ギルダーツ見なかったか！」

……ギルダーツ？　週サラーはギルダーツとやらに負けたのか……。

「俺を置いてどっか行っちまったんだ。ナナシ、見てねぇか？」

「見てねー」

「そっか。くそぅ！　ギルダーツの奴はどこに行ったんだ！」

「知らねー」

「探しにいくか！　んじゃな、ナナシ！」

「ナツ、気を付けて行けよー」

「わかってる！」

ナツはそのまま駆けていった。何だが、寂しいものだ。それにテンション下がったな。

しかし、ギルダーツって誰なんだろうか。ギルドの仲間か？　週サラーの誘惑にナツが耐えきれるほどの人物とは凄い奴かもしれないな。

しかし、ナツの親ってことはないだろう。ナツの親は信じられないが、ドラゴンらしいからな。その父ドラゴンは今は行方不明で、それをナツは探し続けているらしい。

むぅ、ナツにもやりたいことがあるんだ。私も負けてはいられない。よし。明日は頑張ろう。

そう思考しながら帰路に着く。

家に入ると婆さんは出掛けているようで居なかった。爺さんの所にでも行ったのかな。まぁいいか。それより一度休憩して週サラーだ。週サラーを読もう。あれは何度見ても素晴らしいからな。

「ただいま！　週サラーよ！」

勢い良く扉を開き、床に散らばっている本を蹴散らしながら中に入る。

「おかえりー」

「あぁ、ただいま」

ベッドの上で、横になり雑誌を読んでいる妖精に返事をしながら、私も

「って、カナ！？　何で居るんだ！？」

「声でかい。うるさいよ」

「あぁ、すまない……。って、ちげぇよ。また勝手に入りやがって」

「……来たかったんだもん……」

ベッドで寝転がっていた妖精はカナだったのだ。コイツは時々だが、勝手に部屋に入ってくるんだよな。

しかも、そんな時に限って何時もよりテンションが低いし、話し掛けても気のない返事をするだけだ。

「またあの人とやらに会ったのか？」

「……別に……」

そう答えたカナは再び雑誌を読み始めた。まぁ、あと数時間もすれば話せるようになる。今は何を言っても聞いてないから待つしかない。

さて、それまで週サラーを読むか。机に置き忘れていた週サラーを手に取りベッドに腰掛ける。横になったままのカナが、腰に手を回し引っ付いて顔を埋めてくるが、これも何時ものことだ。

「……ん……」

何か安心するらしい。あと数分もすれば寝るだろう。さて週サラーでも……と思ったが、何故か読む気分ではないな。

さすがに今のカナからは離れらないし、魔法の練習でもするか。

本当は外でやりたかったが仕方あるまい。

ベッドに腰掛けたまま、手を前に突き出す。そして黒光りする魔法陣を手に展開させると、小さな黒い球体に形取られた影を出現させた。

球体は一センチほどの小さな形だ。その球体を私の手から離れさせ地面に落とすと、クルクルと回転させながら部屋中を移動させる。

浮かせたり、螺旋に回転させたりと様々な動きをさせる。

部屋で出来る魔法制御練習の一種だ。回転の速度を一定に保ちつつ、部屋の中を縦横無尽に移動させる。このようなことは一見すると簡単そうなのだが、これが意外に難しい。

それを一時間ほどタップリとやった後は、数を増やして、それの繰り返しだ。今は２５個が限界だが、最初は３個だけでも苦労したのだから、進歩したと言えよう。それから私は夕方まで、制御練習を続けた。

「うわぁ。黒いのぷにぷにしてるね」

「触るなよ！？　バランスを保つのは難しいんだぞ……」

途中で起きて、何時もの元気なカナに邪魔をされながら。

「カナちゃんが側にいるから大丈夫！　ちゃんとナナシの側に居て

上げるね」

「全然、大丈夫じゃない。２６個目に挑戦してたのによぉ」

…

…

…

「ねぇ、ナナシ」

「ん？」

魔法練習も終え、今は机でナイフの手入れをしている、ベッドに腰掛け、足をぶらつかせているカナが話しかけてきた。

「何でナイフ研いでんの？」

「え？　何でって、明日はバルカン狩りだぞ？　準備は怠ったらダメだろ？」

「エルザに怒られたのに、まだ懲りてないの？」

「大丈夫だろ」

「ダメに決まってんでしょ！？　ナナシは弱いんだよ？　ナイフは使ったらダメだからね！」

えぇー。カナまで、そんなこと言うのかよ。手入れしていたナイフを、そのままにしてカナに近付く。

「大丈夫だって」

「大丈夫じゃない。死んだらどうするのよ」

死という言葉に一瞬、ぎょっとしたが、カナの言いたいことは分かる。エルザもいて限り無く可能性は少ないが、例え僅かでも失敗すれば死ぬかもしれないのだ。

そりゃ魔物を狩りに行くんだ。それぐらい覚悟はしなきゃいけないだろう。

「だからエルザは何回も言ってるんだと思うよ」

「……死か……」

「そうだよ。だから……」

「それならお前だってバルカン狩りは危ねぇぞ。死ぬかもしれないんだぞ？」

「私は大丈夫！」

「……何が大丈夫なんだよ……」

「色々と考えたんだけどね。私は強くなりたいんだ。強くなって何時か胸を晴って、あの人に告げようって決めたんだ。だからまだ死ねないよ」

カナは微笑みながら何かを思うように窓の外を見始めた。

あの人。カナが言う、あの人は誰かは知らない。時々、カナが二人きりの時に口に出す人だ。よっほど思いを告げたい人なのだろうよ。

私は何となくだが、その言葉に、口に出されたのよりもはるかに意味が込められているのを感じた。

そう感じたのは初めてだ。今回はよほど強い意志があるのか。初めて私は、こんな日の微笑むカナを見た。普段の明るい様子に戻っているのだが、何か違う。

何て言うのだろうか。悲しい？いや寂しい……。そう、寂しそうな目なんだ。そう言えば、この目は見たことがある。エルザ達も時々だが、こんな目になるんだ。

カナにも何かがあるのだろう。ナツがドラゴンの父を捜すような何かが。

エルザやグレイが何故その目を見せるのか、理由は知らない。だが、その顔を見るのは嫌だった。いや嫌だ。エルザ達もそして目の前にいるカナの目を見るのも。

「きゃっ！？」

そう考えた時には、ベッドに座るカナを無意識に抱き締めていた。最近はそうだ。エルザの時も何故か、抱き締めてしまう。ナツ達の時も頭を撫でてしまう。

寂しそうな目を見たくなかったのかもしれない。私が寂しく感じたのかもしれない。ただの自己満足なのかもしれない。理由はよく分からないが、今はただカナを抱き締めたかった。

「大丈夫。何時か、お前の思いは届くさ」

「そうかな」

「あぁ、大丈夫」

「本当に？」

「あぁ。それに困ったら私を頼ると良い。なんせ私達は友だからな。お前が困った時は、ずっと側に居てやる」

「……ぅん……ありがと」

最初は驚いていたものの、カナは胸に顔を埋めると、背中に手を

回しギュッと抱き締めてくる。

カナは何度もその会話を繰り返す。何度も何度も。まるで自分を安心させるためのように。

何度も何度も。そして私も何度もカナに囁き、頭をゆっくりと撫でた。カナを安心させるように。私が安心するように。

コイツにも、やりたいことがあるんだ。私がやりたいことを探しているように。

私だけじゃなく、みんな何か悩んでいるかもしれないな。それに比べて私の悩みなんて、ちっぽけなことなのかもしれない。みんな生きて悩んでいるんだ。そして私も悩んで生きている。

私は今まで、婆さんやエルザに助けられてきた。ならば次は私が助ける番だ。友を助ける番なのだ。

しかし、今も過去も私は無力だ。お前に何が出来る？と尋ねられたら、首を横に振って、ただ抱き締めて頭を撫でることしかできない。

あと数ヶ月で私は成長できるのだろうか。エルザのように友が困った時に助けられる存在になれるのだろうか。

私の胸から紅潮した顔を上げ、潤んだ目で見上げてくるカナを撫でながら、そう何度も考えていた。何度目かの自問自答の時、立ち上がって首に腕を回し、顔をスリ寄せてくるカナが潤んだ目を向け

てきた。

「ナナシって何時も変だけど、時々、もっと変になるよね」

「……ひでぇな……」

カナは微笑み、私の髪をいじる。

「ふふっ。でもナナシといると安心するのよ？」

「なら抱き締めたかいがあったな」

「そうね。……明日のバルカン狩りは成功させないとね。頑張ろうね」

「……そうだな……」

そうだ。そうだった……そうだよ。　私にも出来ることがあるかもしれない。　カナに危険が及ばないようにサポートすればいいんじゃないか？

カナが自分の思いを告げられるまで守ればいい。いやカナだけじゃない。

ナツやグレイ、エルザも私が影から守ればいいんだ。コイツらが

何故、寂しそうな目をするかは知らない。でも知らなくても守ることはできる。

今までの私はただ体を抱き締めて、頭を撫でることしかできないと思っていた。

しかし、私には魔法の力があることを忘れていた。この闇から生まれた魔法の力が。そんな力でもカナ達を守ることができるかもしれない。何かしてあげることがあるかもしれない。

そうさな、エルザの言う通り、今回のバルカン狩りは魔法だけに専念しよう。そしてカナ達をサポートしてみよう。

ナイフはまだ練習中だからな。今日のように自分を守るので精一杯だ。カナ達を守れなかったら、今の決意は意味がないものになる。

しかし練習は止めないぞ。ナイフも上達すれば守れるようになるしな。だがまずは、明日を頑張ろう。カナ達をサポートしてみよう。

ナナシ・ネームレスの名にかけて。

「……ナナシ……」

「どした？」

「今日は側にいてもいい？」

「勿論だ」

「ありがと♪」

よし、明日の私は

影使いだ。

…

…

…

むっ。それにしても、やはり女の体はやわやわだったな。

エルザを抱き締めた時は、鎧を付けていたから分からなかったんだよなぁ。

バルカン討伐（前）

東の森に朝霧が立ち込む時間。何時もなら、私はまだ寝ているのだが、今日は違う。

既に薬草採取を終わらせ、婆さんに薬草を渡した後、自室に帰っているところだ。昨日、決意したようにカナ達をサポートするために、今日は頑張らないと……ん？エルザ？

自宅内にはエルザの姿があった。私の部屋の前で扉を何度か叩き、返事を待っている。今日、エルザ達はハコベ山でバルカンを狩る予定のはずだ。それに同行予定の私を迎えに来てくれたのか？

「またナナシは寝ているのか。しょうがない奴だ。それに、どうせ部屋も」

エルザは呟きながら、部屋に入っていき、扉がしまった。てか少し遠いが、振り向けば分かるぐらいの後ろに居るんだが……。

私は背後に居るのに、何故に気付かないのだろうか。やはり爺さんが言っていたのは本当のことか？

爺さん曰わく、私は気配が薄く隠密性が優れているらしい。最初

はエルザ達に自慢していたのだが、カナに

『それってさ。逆に言えば、影が薄いってことなんじゃない？』

と言われ、バカにされていることに気付いた。何て失礼な爺さんだ。

しかしカナが言うことの方が正しいのだろうが、よくよく考えればだ。　気配が薄いと言うことは、相手の不意を撃つのに都合がいいかもしれない。と言うことになる。さっきもエルザは気づかなかったしな。

ふむ、つまり忍者みたいになれるということだな。それならナイフを使っての戦闘に利用できるかもしれない。よし、今度、色々と練習して

『なっ！？ななな何故カナが居るんだ！？』

むっ。部屋に入ったエルザが騒いでいるようだ。全く、私が居ないからと騒ぎやがって。困った奴だ。私が側にいて守ってやらないといけないな。なんて冗談を考えながら部屋の中に入る。

「おいおい、エルザ。私は後ろだ」

「ナナシ」

「ひっ！？」

へ、部屋に入ると、かか顔が不機嫌そうに歪められているエルザ様が佇んでいらっしゃった。非常に怖い。

つい叫んでしまったではないか！　エルザ様は佇んだまま、此方を見ている。私は悪いことなんかしてないぞ！？

「ナナシ？」

「ななな何だよ。エルザ様！？」

「カナがベッドで寝ているのは、どういうことだ」

「は？」

「だから！　どうしてカナがお前の部屋にいるんだ！」

何だ、そんなことか。エルザの言う通り、ベッドでは可愛らしいピンクの寝間着を着たカナが寝ている。

昨日帰らずに、ここに泊まったんだ。私としても、昨日は何となく居て欲しかったので、嫌がる婆さんを無理矢理説得して、現在に至る。

それに昨日は、今日がハードな一日になりそうだったので、薬学は休みにしてもらい、部屋でカナとゴロゴロしていた。

いやぁ、久しぶりにグータラしていたら、やばくなったぞ。この前の街デビュー時に購入した変身魔法の魔導書が傍になかったら、グータラな時間に溺れていたかもしれないな。

まぁカナに叱咤してもらいながら、なんとか読み進め、一応術式までは覚え変身も成功した。あとは練習あるのみだな。

カナが一日で魔法を覚えたことに驚いていたんだが、普通だろ。変身魔法とか婆さんのスパルタ薬学に比べたら楽勝だ。

さて、それにしても、今後もカナやナツ達が家に来るなら、婆さんとは別の家にしたほうがいいかもしれない。

婆さんの人間嫌いは波があるからな。今、改めて考えると昨日なんて物凄く怖かったんだよ。

うむ、別の家に住んでみるか。独り立ちするため勉強をしているんだ。一人暮らしにも慣れていた方がいいだろう。私の今後も含めて、相談しておこう。

「ナナシ？　聞いているのか？」

おっと、エルザと会話してたんだった。俯いていた私はエルザの目に視線を合わせる。

「あぁ、カナは昨日、ここに泊まったんだ」

「……い、一緒に寝たのか？　だだ抱き締めたのか？」

「ん？　あぁ、そうだが。何か悪かったか？」

「……別に……」

エルザは不機嫌そうな面持ちなのだが、何時もと違うな。

「どうしたんだ？　らしくないぞ？」

そう言いながら、私はエルザの頭をワシャワシャと撫でる。

「……別に何でもない……」

「そうか？　本当に？」

「本当だ！　それより撫でるな！」

「おや、これは失敬」

ふむ、また怒られてしまった。何時もなら、このまま撫でている

のだが、そろそろ熟睡しているカナを起こさないとな。柔らかなエルザの髪から手を離す。

「……ぁ……」

「ん？何だ？」

「べ、別に何でもない」

今日は変なエルザだな。さて、カナを起こすか。ハコベ山には半日掛かるらしい。そして今日1日でクエストを終わらせる予定だから、早出しないといけないらしいのだ。

……

……

……

～ハコベ山、麓～

太陽が爛々と輝き、ハコベ山の麓は暖かい日差しが差し込んでいる。遠くの方にも木々や草花が広がり、日の光を受けてすくすくと育っていることだろう。

しかし山の麓から上は、季節外れの雪が深々と降り積もり、雪山と化している。中腹や頂上は吹き荒れる豪雪により見えない。

つまり登れば登るほど雪が吹き荒れる山なのだろう。奇っ怪な場所だ。中腹や頂上に登ったら、途中で死にそうだな。今回は、ここ麓付近で下りたから、討伐はここいらでやるのだろう。

さて、マグノリアから馬車でやってきた私達は、その雪山に足を降ろしていた。うむぅ。山は初めて来たぞ。話には聞いていたが、直に触ると何かが違うな。特に

「見ろよ、エルザ！　雪だぞ雪！　冷たいぞ！」

「……ふん……」

今日はずっと機嫌が悪いエルザだ。本当にどうしたんだ？　私が魔法だけを使ってサポートするとエルザだけに宣言したのに、ずっと不機嫌なんだ。エルザの手助けになるし、少しは喜んでくれるかな。と思ったのだが……。

「どこだ！　サルゥ！」

「待ちやがれ！　ツリ目野郎！」

そう考えていると、元気よく叫んだナツと半裸の少年は雪山を走り

出した。本当に元気な奴らだ。

「……何でアイツらは元気なのよ。てかグレイ、服を着なよ！」

寒いのか、馬車にいる時から私の腕に引っ付いているカナが少年グレイに口を出す。そう、半裸の少年の名前はグレイと言う。

グレイ・フルバスター。青みがかった黒髪に服を脱ぐと言う変態性癖を持った男だ。

全く、雪山で服を脱ぐとか正気か。カナなんてコート着ても震えてるんだぞ。しかし、抱き付いてくる体が柔らかい。何これ、ヤミツキになるだろうが！

「ぐふふ」

「おおぅ！？」

カナに注意されたグレイは驚き叫んでいる。

「ここに変態が二人いるぞぉ！　ナナシとグレイは変態だぁ！」

「「何だと！　ナツ！」」

「へへぇ～ん。来いよ！」

「「待ちやがれ！」」

カナを離し、走り出すナツをグレイと一緒に追い掛ける。山の緩やかな斜面を駆け上がりながら。

「あっ、ちょっとあんた達！　まだ山に入ったらダメだよ！」

何かカナが言ってるが無視だ無視。今はナツと一回話し合わないと気が済まない。　私をグレイと同じ服脱ぎ変態にするな！

私は全速力で走りナツに

「くそ炎が！」

「追い付いて見ろよ！」

「ちょっ、お前ら速くない！？」

走り寄れなかった。まさに高速移動とは、このことか。ナツとグレイが光のように走り回る光景が羨ましくて眩しい。山の斜面を行ったり来たりしているぞ。いや、頑張れば私も追い付けるさ！

そう気合を入れた私はナツ達に駆け寄る……が……全然、追いつけないぞ。あいつら人間なのか！？

「はぁ、はぁ」

くっ、息が切れ切れだ。足がぶるぶる震えてやがる。

「ナナシは走るの止めなよ。バルカンを討伐する前に死ぬよ？」

え？　カナにまで抜かれただとぉ！？

「ちょっと二人とも待ちな！」

「サルゥ！」

「上まで登らねぇと居ねぇよ。馬鹿つり目！」

「はぁ、はぁ、ごほっ！？　ごほっ、ごほっ……ちょっタイム……」

あまりに走りすぎて咳き込んでしまった。あぁカナまでも光のように眩しい……。それにしても速いな、アイツら。魔法使ってんじゃない？ぐらいの速さだ。

しかし、山の斜面を全速力疾走は死ぬな。今日はサポートするのが大変そうだ。

さて、とにかく今は荒れ狂う心臓と息を落ち着かせるか。そう考える間に私は雪へと膝から崩れ落ちた。

雪って冷たい……。

それにしても体力を消耗して四肢に力が入らないな。休憩が必要だ。

「走り回れるアイツらが羨ましい」

「初めから体力を使って何をやっている」

「あだっ！？」

エルザに頭を叩かれてしまった。まだ心臓は荒れてんだぞ！

「立てるか？ほら手を掴め」

「おぉ、ありがとよ」

てか、機嫌が直っているな。よかった。やはりエルザは普段通りが可愛いからな。それにしてもカナも可愛いし、フェアリーテイルは凄いな。

「ナナシ。まさか今ので疲れたのか？」
「ん？　あぁ、五分休憩だ」
「やはりか。ポーリュシカさんの予想が当たったな」
何故か、溜め息を吐かれた。
「確かに私は体力はないが、今日は大丈夫だと思うぞ？」
「いいか、ナナシ」
「何だよ？」
「これから私達は山の中腹まで登り、バルカンを討伐するんだぞ。お前の体力は持たないのではないか？」
え？
「ちゅうふく？」
私の言葉に頷いたエルザが指を差す。細く綺麗な指先を辿っていくと、そこには豪雪吹き荒れる雪山。

「あそこまで行くんだ」

……討伐クエストでは私は力になれないかもしれない……。

バルカン討伐（中）

登れば、登るほど雪が吹き荒れる奇怪な場所、ハコベ山。

そんな場所に私とエルザ達、フェアリーテイル一行は居た。

まだ雪は酷くなく、深々と降っているだけだ。まだまだ目的地までは遠い。私たちの目標は中腹にある洞窟なのだ。

あぁ、こんな雪山なんぞ、魔法を使えば楽なのだがな。しかし使えない理由がある。例えば、転移魔法を使えば中腹や山頂まで楽に移動できる。

だがそれではカナ達と一緒に移動できなくなり、サポートの意味がない。それに私を一人にさせるのは危ないからとエルザに却下された。

また影に潜って移動すれば、他の魔法は使えない。これまたサポートが出来ないから私がいる意味がない。

それにずっと影に潜るのは私の魔力が足りなさそうだ。エルザ達より多いとは言え、無限にあるわけではないからな。

だから、歩くしかないわけだ。一歩一歩、頑張ろう。そう私が気合を入れた時

「……もう、無理かも……」

ドサリと音を立て、雪が積もる地面に倒れる貧弱野郎がいた。情けない。非常に情けないぞ。

「またかよ！」

「魔法は強ぇのに、本当に体力ねぇのな。ナナシって」

情けないぞ……私よ……。気合いを入れた途端、力尽きてしまった。いやぁ、それにしても本当に雪って冷たいなぁ。

「お前達、少し休憩するぞ。ナナシが限界だ」

「「えぇー」」

「しょうがないだろう。ほら、一旦休憩だ。休憩」

「ナナシ、大丈夫？」

カナよ、指でツンツンするのは止めてくれないか。今の私はグロッキー状態なのだ。

と言うか、何でコイツらは、山を登っていると言うのに元気なんだよ。息切れの一つもしていないのはおかしくないか！

私なんてもう立てないんだぞ……。やはり、私は討伐クエストで

は力になれそうに無いぞ。サポート？　何ソレできねぇよ状態だ。

今回、私は完全にお荷物だ。逆にサポートされているんだ。あぁ、情けなくて涙が出ちゃう。……だって私、体力ないんだもの……。

「ほら、馬鹿ナナシ。ここに頭を置け」

「んあ？」

「頭を動かす体力もないのか。しょうがない奴だ」

「ねぇ、ナナシ？」

未だに、私の頬を指先で突いて来るカナが、首を傾け、不思議そうな顔で尋ねてくる。

もう止めろという言葉すら出すのが億劫だ。カナの背後には走り回っているナツとグレイ。お前ら、本当に人間か！？

てか、エルザは……どこ行ったんだ？　そう言えば雪が冷たくなく、暖かいぞ。ついに神経まで鈍ってきやがった。

「ねぇ、ナナシ？　聞いてる？　返事しなきゃ、絶交だよ？」

絶交！？コイツは何てカード切って来るんだ！

「……なん……だよ……」

「よろしい♪　それでね、私思ったんだけどさ。こんな時に変身魔法を使えばいいんじゃない？」

え？

「カナ、何を言っている。ナナシは変身魔法なんか覚えていないぞ」

変身魔法？　てか、何時の間に、私はエルザの太ももで寝ていたのだろうか。道理で暖かいはずだ。

「エルザ知らないの？　ナナシは昨日、変身魔法を覚えたのよ？ねぇ、ナナシ」

「ん」

「またカナばっかり……最近、仲良くしすぎじゃないか。この二人……」

しかし、カナは何故、変身魔法を？

「小動物に変身なよ。私が持ってあげるよ」

「その手があったか！」

おぉ！　何故、今まで気付かなかったんだ！　そうさ、運んでもらえばいいんだ。こんな雪山なんぞ楽勝さ。これでカナ達をサポートできるぞ！　何だか立ち上がれるような気がしてきた！

「よっしゃぁぁあ！　行けるぞぉぉ「きゃっ！？」ぉぉぉお？」

何だ、このやわやわでぷにぷにには？

「やっ！？」

ん？　手に吸い付いてくるようで暖かいぷにぷに？　それにシルクの感触？　ヤミツキになるな。

「ななななっ！？」

「あぁ、エルザのか……道理で。ふむ、やわやわだな。それに今日は可愛らしいリあぶんっ！？」

「こここここの変態が！　ひひひ人が優しくしていると思って付け上がって！」

「ち、違っ！？　ただ立ち上がろうとしただぶはぁぁあ！？」

「立ち上がるのに、てててて手を入れて触る必要はないだろうが！
この馬鹿者！」

「ぐふぅ！？　助けてカナ！？　ぐえぇぇ！？」

グーパン＋踏みつけだとぉぉ！？

「てか見られるのはよくて、触られるのはダメとか理不尽だぁ！
私はただ天国を」

「変態！」

「ぐふぅ！？」

「……ナナシってホント駄目ね……ちゃんと側にいて上げなきゃ、
逮捕されるわ」

……

……

……

～ハコベ山、中腹～

山を登り始めて、すぐ体に限界が来た私は当然ながら動けなくな

った。ナツ達から浴びせられる罵声。冷たい目。あぁ、私ってお荷物なのさ。そう考えていた私にも光が差した。

魔法も体の一部、どう頑張っても体は急激に成長しない。だったら今の自分にあった魔法を使えばいいんだ。

そうさ、私は変身魔法を覚えていたんだ。おぉ、これは行けるぞ！　エルザにしかサポートすることは教えていないからな。エルザの持ち運べる大きさに変身しないとな！

そう気合を入れて、エルザが持ち運べるように小さな黒蛇に変身したら、……持ってくれなかった。

逆に気持ち悪がられて蹴られてしまった……。酷くないか。一番変身しやすい生き物なのによ。カナも私に触れようともしなかった。

ナツ達は大喜びしていたのだがな。女心は分からないものである。

まぁ、そんなこんなで、様々な小動物に変身してエルザの許可が出たのは、漆黒の毛並みを持つ赤目の子猫。

そうして、エルザに抱えられながら私は中腹を目指す。鎧が当たり痛いが我慢すべきだろう。

それにしても移動が楽チンだな。ふと頭を……あれ？　やっぱりサポートされてないか？　……と過ぎったが、忘れることにしてサポートするため魔法に専念する。

エルザと相談し、カナ達が見ていないところで、最近使うようになった探索魔法を発動させる。そうして時々、カナにも抱えられな

がら、辿り着いた。

中腹は見渡す限り。一面白銀の世界。草花や木々など生えておらず、ここはどこなんだよ風景だ。

空は果てしなく白く、目の前も白い。先程まで見えていた麓さえ白い。つまり豪雪だ。私達は豪雪吹き荒れる中腹の真只中にいるのだ。

そう、中腹にいるのだ。体力はなく一時は森に帰ろうとしていた私は中腹にやって来られた！

「ナナシ、あまり動くな。尻尾がくすぐったいぞ」

「へい」

「エルザ、次は私に代わってよ」

「あっ！？　何をするカナ！」

カナに首根っこを掴まれた私はカナに抱き締められる。おぉ、ペッタンコのくせに柔らかい。天国だ。そう幸せに浸っている間にもカナとエルザは何かを話しているようだ。

「カナ！ナナシは私のだぞ！」

「エルザのじゃないでしょ。私は寒いんだからいいじゃない。それにナナシは困った時は私の側に居てくれるって言ったんだから」

「それなら私も言われたぞ！抱き締められながら言われたんだ。私の勝ちだな。ふふん♪」

「……私も同じなんだけど……」

「……何だと……」

むっ、先程展開した魔法にバルカンの反応ありだ。よし、カナの腕から降り

「「たらし？」」

ることができなかった。ぼ、暴力反対だ！　やめっ！？　揺さぶり攻撃だと！？　シェイクはやめ

「ぐえぇぇ！？」

…

…

…

「おらぁ、サルゥ！」

「次は俺が倒すんだよ！　馬鹿ナツ！」

「寒いぃ～」

「ウホホォ～！」

目の前では豪雪の中にも関わらず、バルカンと元気良く対峙しているナツ達の姿。

隣にいるカナだけは寒そうに両手で私を抱きしめ、体を温めている。やわやわで最高だ……ということは考えられない。何故なら私は……

「うぷ、気持ち悪ぅ」

酔ってしまったからだ。一時間前に私とカナとエルザの戦闘が行われ、酷く揺さぶられて気持ち悪くなったのだ。ちなみにカナ達はバルカンを既に二匹倒している。

あぁ、やはり私には討伐クエストでは手助けできないということか。逆にお荷物になる始末だ。と言う冗談は置いておこう。二人にシェイクされたから非常に気持ち悪い。

「こら、カナ！　真剣にやらないか！」

寒がるカナを真横で叱咤するエルザ。

「分かっているわよ……うぅ、寒い……」

「カナ、ナナシを置いて行け。世話は私がする」

「……戦闘が終わったら私が面倒見るんだからね」

ふっ。この会話を聞くたびに、何度も目の前が雪で滲むのは何故だろうか。しかし今の私は一歩も動ける状態ではない。カナは渋々と私をエルザに手渡す。

「もうちょっとゆっくりして……気分が……」

「我が侭言うんじゃないの。これでも優しくしてるんだから」

カナは手渡すと、暖かそうな懐から魔道具であるマジックカードを取り出し、ナツ達と同様にバルカンと対峙し始めた。

私はエルザの腕の中。ゆったりとしている間に体調が戻ってきたようだ。そうこうしている間にナツ達とバルカンの戦闘が始まっていた。

ナツ達がバルカンに襲い掛かるのを見ながらエルザは私に向けて喋る。

「ナナシはバルカンを倒せそうか？」

「状況と魔法だけに専念すれば倒せるだろうよ」

そう、意外にここのバルカンは森バルカンより弱く見える。カナやナツ、グレイが三人掛かりで倒しているので楽に見えただけかもしれないがな。

だがエルザとの模擬戦を続けていた私には難なく倒せそうだ。まぁやってみなきゃ分からないが。

「もし、バルカンと戦うことになったら魔法だけを使うんだぞ」

ナツ達を見ながら心配そうに喋るエルザ。

「わぁってるよ」

そう言っている間にもナツは口から火を噴出させ、グレイは氷の槍を飛ばし、カナは落雷をバルカンに落としている。

完全にオーバーキルだろ、アイツら。あっ、バルカンが崩れ落ちたぞ。後少しで三匹目、終了だな。このチームに出会ってしまった不幸なバルカンに冥福を祈りながら、エルザと会話を続ける。

「エルザ、次は探索していない洞窟内だよな？」

「その予定だ。本当にバルカンはこの辺りには居ないのだな？」

「あぁ、今の所ゼロだ。影蛇達は感知していなかったからな。もう一度周囲を探索させるか？」

「頼む。それで見つからなかったら洞窟に行くぞ」

「へいへい」

まだ少し気分は悪いが、このままでは情け無いし、私の存在意義がない。ちゃんとサポートをしないとな。

ちなみに私のサポートはバルカンを倒すことではない。今回はカナ達の討伐クエストだからな。私がすることは周辺にいるバルカン達の位置や行動を把握し、エルザに報告することだ。

さて、探索をするか。エルザの腕から離れ、冷たい雪の上に降り立つ。あぁ冷たぃ～。早くエルザの腕に戻りたい。早くせねば、私が暖めた鎧も冷えてしまう。そう考えつつ

【影蛇】

ポツリと呟き、足元に黒光りする魔方陣を展開させる。

魔方陣からは２５匹にも及ぶ一メートルほどの黒蛇が、にゅるにゅると音を立てながら出てきた。魔法制御練習の時、カナが邪魔をしなかったら２６匹になっていたかもな。

「周辺全ての生物確認と監視をやれ。見落としだけはしてくれるなよ」

私の指示に頷いた蛇達は、寒さなど物ともせずに雪山の至る所に移動。バルカンや他の魔物達を探索しに徘徊を始めた。まぁ蛇は体温を感知するから、見落としはないだろう。

…

…

…

ナナシの探索魔法は周囲に現在操作できる２５匹もの蛇を放し、情報を収集させる魔法だ。

たった２５匹のため広範囲とは言えないが、小規模なら、生き物の位置を迅速に察知できることが可能であった。

「もう終わったのか？」

ナツ達の戦いを見ていたエルザが足をカリカリと掻く子猫に気付

き、抱え上げる。子猫は寒さに震えながら喋る。

「あ、あぁ、後は連絡待ちだな。あと数十分もすれば周辺の情報は集まるはずだ」

「そうか。情報が手に入るのは助かる。頼りにしてるぞ」

「こんなことしかできないけどな」

子猫はエルザの鎧にくるまったまま、一匹の蛇に思考をリンクさせ探索を始める。突発的な事態で自分が守るべき者達が傷つかないように。

しかし、それぐらいしか出来ないことに子猫は少しばかり腹立たしく思っていた。エルザが動くとまだ気持ち悪いし、ましてや地表を移動する体力などない。そんな不甲斐ない自分に。

「私は役に立っているんだろうか」

子猫の返答にエルザは意外そうに目を瞬かせた。

「十分だ。逆にお前ほどの探索魔法を持っている者は、ここには居ない」

「……むぅ……。こんな力でも喜んでもらえて何よりだな。この調

子でエルザも守ってやる！」

「ふっ、その前に体力をつけないといけないぞ」

エルザは安心しているように微笑み、子猫は小さく体を竦める。

「わぁっているよ……手厳しいな……」

「ふふっ。お前が強くなるのを楽しみに待っておこう」

「頑張るさ」

エルザにそう言われた子猫は気合を入れる。自分の力が足りないのならば、守れるように頑張って強くなればいいと考えながら。

しかし、ふと気付いた。強くなれるのに何年掛かるのだろうかと。このままでは、半年では無理だ。ならば数年掛かるのではないかと。

そう思考した子猫は一瞬、苦い表情を浮かべ、顔を歪ませた。

（ソイツが生き返る前までに、私は強くなれるのか？カナ達だけでなくエルザも守れる存在になれるのか？）

再び、思考の海に潜り込もうとした時、

「何だ！？」

ナツの大声に子猫は戻された。段々とナツ達に近づいていることから、エルザも走り寄っているのだろう。

子猫は顔を上げ、ナツ達が見ている方向を見る。それはナツ達に倒されたバルカンであった。しかし、ナツがただの絶命したバルカンに声を上げたのではない。バルカンが光り輝いていたのだ。

「まさか」

そうエルザが呟いた時、眩い光を出したバルカンをボフンと煙が覆う。そして、次の瞬間には初老の男へと姿を変えていた。

「バルカンがおっさんになったぁ！？」

「珍獣か！？」

「違うわよ！　ギルドで教えたでしょ！」

ナツとグレイ、カナが声を荒げながら男へと近付く。一方、子猫を抱えたエルザも駆け寄る。

「ナナシ」

「あぁ、テイクオーバーされていたんだ。初めて見たな」

「おい！このおっさん生きてるぞ！」

雪が吹き荒れる音に負けじとグレイの声が響く。グレイの言う通り、男は傷だらけであったが、呼吸をしており死んではいないようだ。

男を見て、子猫はめんどくさそうに眉を寄せる。

「洞窟内に運ぶ。ナナシ！　運んでくれ！」

「治療するなら集中できないから蛇達を消さなければならないぞ。それに洞窟内は探索していない」

「周辺には私が気を配る。早くこの人を運ぶんだ」

「ちっ……厄介な……これではカナ達が守れなくなっちまう」

「ナナシ！」

「わぁってるよ」

エルザに催促され、そう呟くや否や、男の影から何本もの漆黒の手が出現。

「「おわっ！？」」

「きゃっ！？」

いきなりの出現に驚くナツ達を尻目に、漆黒の手は男を優しく包む。そして洞窟内へと運ぶため、ゆっくりと移動を始めた。

バルカン討伐（後）

先行するナツ達は鋭い目で辺りを警戒しながら、雪山から洞窟内に進んでいる。

特にエルザは厳しい雰囲気を強め、注意深く周りに視線を配っている。全員が警戒しつつ、洞窟内に入ると、そこには何も居なかった。

規模も天井も広い洞窟内は奥に暗闇の狭い入口がある。エルザ曰わく一本道が続いているらしい。生暖かい風が吹いており洞窟がどこかに繋がっていることを示していた。

何も居なかったことに、ほっと胸を撫で下ろした一行は、変身を解いた私を中心におっさんの治療を始める。

おっさんは軽傷だったが、足の怪我だけが異様に酷い。血がどくどく流れ出している。これのせいでバルカンにテイクオーバーされただろう。しかし、バルカンにつけられた傷ではなさそうだな。

「……助かるのかよ？」

「大丈夫だろうよ。足以外はな」

ナツの心配そうな声に返事をした私は影から道具箱を取り出す。蓋を開けると、中には色とりどりな液体が入った瓶や、塗り薬が陳列している。

「いっぱいあってすげぇな。それナナシが作ったのか？」
「ナツ、私にはそんな力はない。全部、婆さんが作った薬さ」
そう言いながら布と緑色の液体が入った瓶を取る。
「カナ、これを布に染み込ませて足以外の傷に塗り込んでくれ。あぁ服は脱がせなくていい。怪我は足だけが問題のようだからな」
「わ、わかった」
「グレイは氷を出してくれ。ナツはその氷を溶かせ。水が欲しい」
「「おうよ」」
エルザが辺りを警戒する中、おっさんの治療は進んだ。
「……ぐっ……」
カナが塗る薬が傷に染みた痛みでおっさんは意識を取り戻したようだ。ふむ、死にはしないな。

「おっさん！　大丈夫か！」

「こ、ここは？　ぐぅぅ」

そんなおっさんに向かってナツが語り掛けている。てか、そんなことより治療を進めるか。何本かの瓶を取り布に染み込ませる。それを洗った傷口に押し当てる。

布は徐々に血に染まるが、何回も布と液体の薬を変えて続ける。そうして流れ出てくる血が少なくなると塗り薬の出番だ。傷口にこれでもかと塗り付け続ける。

おっさんの苦悶の声が聞こえるが知ったこっちゃない。私は婆さんのように万能じゃない。まだ簡単な応急処置しかできないのだ。

塗り薬の次は液体の薬。それの交互の繰り返し。それが終わった後は包帯を巻いて終わりだ。早く病院に行くことをお勧めしよう。

…

…

…

男の治療が終わった後、ナナシを残してエルザ達は洞窟の奥へと向かっていった。残り二匹のバルカンを倒さなければいけないためであった。

最初はナナシを一人にすることに渋ったエルザだったが、男を見

ておくから大丈夫だと言うナナシの言葉に説得され、奥へと進んだ。

治療された男は目を覚ましており、ただ呆然と岩の天井を見ていた。だがふと思い出したのか男は口を開く。

「そう言えば君の名前は？」

「知らなくても問題ない」

道具を整理しながら、ナナシは憮然と言い放つ。

「いや、命の恩人だからね。名前だけでも教えてくれないか？」

先程まで、怪我を負っていたが、ナナシの応急処置で良好のようだ。

伊達にポーリュシカのスパルタ薬学を習っていないと言うことか。治療魔導士として最低限の力量は信用できるようだ。

「あっ！　ごめんよ。礼を言ってなかったね。今回は助けてくれてありがとう。君のおかげで助かったよ」

「私ではなく、アイツらに礼を言うんだな。私はお前を助ける気はなかった」

ナナシは喋ることはないと言わんばかりに突き放すように淡々と口にする。

難儀な子供だ、と男は思う。しかし男は穏やかな笑顔のまま話す。

ハコベ山には珍しい物があると聞き、興味本位で来たこと。魔導士であるが意外に力が衰えていたため、ワイバーンに負け、バルカンにテイクオーバーされたこと。

自分が昔、魔法開発局にいて、今はマグノリアで魔法具屋を開いて悠々自適に暮らす日々を送っていること。

男はナナシに語りかけた。しかし、ナナシは興味なさげで薬の後片付けをしており、聞いている様子はない。

まいったなと包帯だらけの手で頭を掻いた男はナナシが気の向く話はないか様々な話をした。マグノリアや他の街のこと。自分の家族のこと

そして話は魔法のことにも及んだ。四大元素、他には魔導具。そして古代の魔法のことについても……。

「今でも古代魔法は存在すると言われている。例えば、滅竜魔導士が有名だね。他には……古代魔法の遺物で封印されているけどゼレフ書の悪魔とかかな」

そう話した時、ぴくりとナナシの体が動いた。

「封印？　それは魔法で封印しているのか？」

「あぁ。そうだね」

それまで黙っていたナナシが口を挟んだ。今まで興味なさげだったが男に鋭い視線を向ける。

「……封印魔法……」

「興味があるのかい？」

「そんな魔法が存在するのか？」

「あるさ。それがなければ古代の遺物は……」

男が話す間にナナシは何かを考え込むように俯き、思考の海に潜った。そして幾分か時間が経つと再び顔を上げる。

「本当に封印魔法が存在するんだな？」

「も、勿論さ」

ナナシの言葉は冷静そのものであったが、炯々たる眼光と何度も

口にする言葉がそれを裏切っていた。

「おっさん。それは……」

そう言いかけた時

「「ウホッ！」」

洞窟の奥から2体のバルカンが出現。バルカンは獲物を見つけたことに喜び、襲い掛かるために駆け寄ってくる。

「あ゛？」

ナナシはバルカンの動きに挑むかのように眼光を鋭くする。それに対抗するように、駆け寄った一匹のバルカンが素早い動きで腕を振るが

【大蛇顎】

ナナシがそう言った瞬間、背後の影から出現した頭だけの大きな黒蛇に、バルカンは喰いちぎられた。いとも簡単に。

上半身を喰われたバルカンは糸の切れた操り人形のように己の血

溜まりの中に崩れ落ちる。

「っ！？」

男は声にならない悲鳴を上げた。その光景を見たからではない。そんなモノは魔法開発局にいた頃に慣れている。

男が悲鳴を上げたのはナナシから言い寄れぬ殺気と息の詰まるような恐怖を感じたからだ。だが、ナナシの表情や口調が変わったわけではない。

「今、話をしてるんだ。邪魔をするな」

そう言いながら立ち上がったナナシは一歩前へ。瞬く間に桁外れの魔力がナナシの体から解放された。凄まじい魔力の放出。洞窟が、大地が、空気が震えた。

「ウホッ！？」

その圧倒的な魔力を肌で感じたバルカンは、あっさりと背を向けると、洞窟の奥へと去ろうとする。

しかし、未だに消えていなかった首だけの大きな影蛇が動く。まるで魔力の放出に呼応するかのように、ハッキリとした大蛇に具現

化したのだ。
人間の何倍もある長大な体。光沢のある赤目。巻き付くだけで傷付けそうな黒き鱗。その大蛇は影から這いずり出ると、洞窟内を狭そうに、しかし素早く移動する。

「■■■■ー！！！」

「ウ……」

そして、咆哮の後、禍々しい牙が並んだ顎でバルカンに喰らいつくと、楽々と喰いちぎった。

空気が張り詰める。そして息の詰まるような沈黙のため静寂が流れる。だが、それも一瞬にしてナナシの慌てる声によって破られた。

「……や、ヤバくね……」

あたふたし始めたナナシは視線を洞窟の奥にやる。その頬と背をドッと汗が伝っていた。それもそのはずだ。バルカンが来た方向はエルザ達が入っていった場所なのだから。

「おっさん。話は後だ。私は奥へ向かう！」

先程の殺気など微塵もなく慌てふためいたナナシは大蛇を一撫ですると

「コイツを置いていく。私が居なくてもバルカンに対抗できるはずだ。話は後で聞かせて貰うからな」

そう言い放つと、怪我で動けない男の返答を聞くことなく、ナナシは洞窟の奥へと移動を開始した。

残ったのは呆然としている男と男を守るように辺りを警戒する大蛇だけ。洞窟には、ただシュルシュルと蛇の鳴き声が響いていた。

…

…

…

ナナシが走る洞窟では今の所、バルカンは出て来ていない。薄暗い洞窟内の奥を目指して必死に走る。

影に潜り移動したいが大蛇を出しているため、行動が制限されていた。だが山に比べて平坦なため体力は持つようだ。

ただ、それも長く続くと息は荒れ、体力が無くなってきた。端から見れば早歩きをしているようにしか見えないが、ナナシはそれで

も走る。

そんな時、前方から三匹のバルカンが暗闇から姿を表す。バルカンの姿にナナシは双眸をぎらりと光らせた。

【よ、四つ闇】

息を荒々しく吐きながら、すぐさま、立ち止まり魔法を発動する。背後に数個現れた三日月の刃は回転すると、合図と共に勢い良く飛び出す。

二匹のバルカンは縦横無尽に向かってくる刃を避けようとする。だが刃はバルカンの堅固な肉体を紙のように切り裂き肉片に変えた。狭い洞窟内のため、逃げる場所がなかったのである。

一方、肉片に変わった仲間のおかげでギリギリ避けることが出来たバルカンも漆黒の槍に脳天まで突き上げられ絶命。三匹とも声を上げることなく討伐された。

「はぁ、はぁ」

ナナシは荒れ狂う息もそのままに、バルカンの身体を踏み越えて洞窟の奥へと向かう。走りつつも油断なく様子を伺うことを忘れずに。

走り始めた時、暗闇から一つの影が物凄い勢いで駆け込んできた。

あまりの速さに警戒していたはずなのに気付くことができず、危うくぶつかりそうになる。

だがナナシは、なけなしの体力を使い、後方へとジャンプする。そして再び、魔法を放とうと魔方陣を展開

「ナナシ、私だ！」

しようとしたが聞き覚えのある声にナナシの動きが止まった。

「エルザか？」

「あぁ。それよりバルカン共が此方へ逃げていったのだが……」

エルザは荒々しく息を吐くナナシの背後を見て目を瞬かせた。

「お前が倒したのか？」

「ん？　あぁ、まぁな。それよりカナ達は無事なのか？」

「あぁ、此方は終わったぞ。皆、怪我一つない。後は帰るだけだ」

「何だ、よかった」

体力を使い果たしたのだろう。緊張も途切れ、へたり込んだナナ

シは小さく呟く。気付けば背中はびっしょりと冷たい汗をかいていた。

「はぁ、取り越し苦労だったか。そりゃそうか。私が心配することでもなかったな。（……こんなことなら探索魔法をしときゃよかった……）」

「私達のことを心配してくれたのか？」

「ちげぇよ。バルカン狩りをやってただけだ」

「そうか。私達を心配してくれたのか」

ナナシの様子から嘘を見抜いたエルザは穏やかに微笑みを浮かべ、ナナシに近寄る。

「いや、だから」

「むっ！」

しかし、言い訳を言い出したナナシに、エルザは思い出したように詰め寄った。

「看病はどうしたんだ！？」

「大丈夫だ。蛇に任せたよ」

ナナシの言葉にエルザの顔が歪む。

「あれか……」

「まぁ、あれだ。護衛ぐらいは出来るだろうさ」

「……むぅ……」

まるで身の毛もよだつと言ったように体をさするエルザを見て、ナナシは笑う。

「私の指示以外では人は襲わないから大丈夫だ。……それにしても疲れたな」

へたり込んで荒々しく息を吐いたナナシはエルザに視線を合わせる。

「エルザ」

「どうした？」

「私って、こういう戦闘は苦手なんだな。今回ので身に染みたよ」

「どうしてだ？バルカンを倒したではないか」
「倒しただけさ。倒した後は……御覧の通りだ。帰れなくなっちまうよ」
ナナシは肩を竦めながら、自身の全く動けなくなった体を見る。
「まぁ、倒して終わりではないからな」
「だろ。戦闘は苦手。体力もない。最悪だな」
自称気味に笑うナナシにエルザは近寄ると拳を頭に落とした。
「あだっ！？」
「何をグジグジと言ってるんだ。ないなら、それだけ頑張ればいいじゃないか。わ、私を守ってくれるんじゃなかったのか？」
「……わぁってるよ。ちょっと言ってみただけだ……。エルザも守れるように頑張りますとも」
エルザは黙って聞いていたが、やがて小さく笑いを漏らした。
「守ってもらう日も楽しみに待っているぞ」

「あぁ、待っていろ。追い付いて追い抜いてやる」

（お前を守れるようになるのに何年掛かることやら……しかし何十年も生きれる希望が見えたからな。先にそれに取り掛かるか）

「……私は……」

「何か言ったか？」

「何でもないさ」

ナナシが何とか誤魔化すための言葉を口に出していると、ガヤガヤとナツ達の声が聞こえてきた。

「ようやく来たな。帰るぞ。ギルドに着いたらクエストは無事、完了だ」

「そうだな。おっさんの所にも早く戻ってやるか」

「その前にナナシ、お願いがあるのだが」

「何だ？」

「私が着く前にあれは消してくれないか」

エルザは神妙な顔で語り、ナナシはニヤリと笑う。

「姫様の仰せのままにしましょう」

ナナシの笑みと言葉を聞いた瞬間、ぼふんとエルザの顔が紅潮する。

「ひ、姫！？いいいいきなりなんだ！？」

「おぉ？エルザ様も姫も変わらないと思うがな」

「ふ、ふん。呼びたいように呼べばいい。ほ、ほら、手を貸してやる」

ナナシは深呼吸して、息を整える。そして顔が紅潮したエルザの手を取りながら、何時もの呑気な声で呟いた。

「へいへい」

こうして、ナナシ達のバルカン狩りは終わった。男も含めて無事にマグノリアに帰ることが出来たようだ。

……

……

……

帰宅して幾分かの体力を取り戻したナナシは、ベッドに寝そべって何時ものように思考の海へと身を投げ出す。

（……生きる……）

そして思考の末、一週間後、ナナシはポーリュシカとは別のツリーハウスに住むこととなるのであった。

薬草採取（前書き）

これから三話は前作と殆ど同じです。ストラウス姉妹との出会いについては～影～で後々書く予定です。

薬草採取

深夜。

すでに陽は落ち、月と星の光以外は何もない時間。辺りは暗闇に包まれている。そんな森の中にある大樹の枝に、私は立っていた。

じっと見る視線の先は、辺りを覆う木々が全く生えていない場所だ。そこは半径5メートル程の丸い円の地面が剥き出しになっており、月の光で照らされている。

それでもすべてが光に染まっているわけなく、円の端には数本の木々によって影が出来ていた。

「ゴブリンはまだかよ。遅すぎだろ。何時もなら来ててもいいはずだぞ」

そう呟くが、周りには何の変化もなし。明日は研究もしたいし、エルザのレッスンがあるから早く帰りたいんたが……。今夜は長くなりそうだ。

バルカン討伐から数ヶ月が経つ。あの日以来、私の生活は少し変化した。婆さんとは別の家に住み、一人暮らしを始めたんだ。まぁ、飯の時は食べに行っているから完全な一人暮らしではないがな。

勿論のことだが、勉強も続けて自分がやりたいことを探している。

だが、今はやりたいことだらけで絞れないのが、問題だ。

やはりカナ達を守りたいが答えか？　それとも全てか？　むぅ悩む。

まぁ、その前に封印魔法を習得しなきゃいけないから、真剣に考えられないのだろう。

ちなみに薬学や運動、魔法の練習も、毎日こなしている。そして現在は魔法の練習と薬草採取を平行して行うため、ゴブリンというモンスターを待ち伏せ中だ。

ゴブリンとは東の森に生息する生き物だ。コイツはリスを小型犬くらいに大きくした感じの魔物である。

ピンク色の毛が全体を被い、所々に茶色のまだら模様の毛がある。そして一番重要なのがコイツらが胸に着けている緑色の葉っぱだ。

この葉っぱこそ、私が今日求めている薬草だ。名を【ゴブリンの葉っぱ】と言う。うむ、素晴らしく分かり易い名前だ。感嘆するな。この名前を付けた人は賞賛に値するぞ。

「わん、わん」

ちなみに、このように犬の鳴き声に似ているぅ！？

「「「「「わん、わん」」」」」

で、出てきやがった！　しかも６匹だと！　……なかなかどうして……よい金儲けになるではないか。

実はこいつらは一応、レアモンスターらしいのだ。そして、言わずもがな薬草もレアらしい！　そのため、採取すれば婆さんから駄賃が貰えるのだ。

これを元手に金を増やせば、封印魔法の研究書の資金にできよう。あれはべらぼうに高いんだよな。しかも、全く習得できる気配がない。難しすぎる。

それに封印魔法を勉強する間に、自分のことを色々と考えさせられてなぁ。やっぱり私は……。

「わん、わん！」

……また後で考えよう……。このまま考えたら、また朝になりそうだ。

さて、ちなみにゴブリンは夜行動することが多く、単独では行動しない。そして力も弱く性格も臆病なため、中々人前には現れないのだ。しかし、まぁ６匹も現れるのは初めてだ。

今まではいくら集団行動を得意としているからといっても４匹が最高だったからな。

「「「「「わんわん」」」」」

あぁ、なんて鳴き声だ。まるでどうぞ、ジェニー（金）を貰ってくださいとばかりに鳴いてるようだ。その気持ち、受け取ったぞ。ゴブリン達よ！

幾分か眺めていると、ゴブリン達は、月の光を楽しむかのように踊ったり跳ねたりしている。なんて可愛らしい行動だ。

ファンシーものが好きな女性には、たまらないぞ。私にも金が踊ってるように見えて幻想的だ。

そう考えつつ、私は【影沼】と誰にも聞こえないような小さな声で呟くと、足元に魔方陣を展開した。

黒光りの魔方陣のため月の光に夢中のゴブリン達は気付かない。毎回思うが、バカじゃないのか……こいつらは。普通、発光したら気付くだろうが。

まぁ、それは置いといて、薬草の採取が先だな。まぁ、既に魔法を展開したから時間の問題だがな。

そう思い、楽しそうに踊っているゴブリン達を眺めていると

「わん！？　わん！？」

一匹のゴブリンが悲痛の叫びを上げ始めた。当たり前だな。なんせ自分の体が自分の影に、ずぶずぶと沈んでいるのだからな。

「「「「「「わん！わん！？」」」」」」

おぉ、おぉ、他の仲間が助けに入るか……いいね……いい友情だよ、君達。ゴブリン達は影に沈んでいる仲間を助けようと、全員で引っ張りあげようするが

「「「「わん！？」」」」

沈むゴブリンの影に触れた三匹のゴブリン達は底なし沼にハマったように引き吊り込まれる。

そのゴブリンの影に触れたらダメなんだよなぁ。これで４匹が終了だな。残る２匹は……おぉ薄情じゃないか。沈んでいく仲間達を助けなくていいのか？

「わん！？わ……」

ほらな、１匹いなくなっちゃったぞ？

「まぁ、お前達も終わりだけどね」

私が小さく言っている間も、二匹のゴブリンは仲間達が沈んでいくのを震えて見ていた。コイツらも片づけるか。

そう考えると、その残り2匹のゴブリン自身の影から、にゅるにゅると漆黒の手を出して一本ずつ近づかせる。

2匹のゴブリンは気付いていない。これで終わりだな。影沼も使うのに慣れてきた。今度、エルザの模擬戦で使ってみるか。そう、私が思いを馳せていると

「わんわん！？」

体の首下まで完全に沈んでいる瀕死認定のゴブリンが吠えて教えやがった！？

（野郎！！！）

仲間の必死の声に気付いたゴブリン達は、近付いてくる手をスルリとかわし大きく飛び退く。

（失敗だ！ちくしょう！）

かわし飛んでいるゴブリン達はほっと安堵する。それを見て私はくやしが

「なんてね」

るわけがなかった。

「「！？」」

私がニヤリと笑うと共に、ゴブリン達は地面に着地した。しかし、着地した途端に木々で出来た影にズブリとハマり、声を出すこともなく、一気に沈んでしまった。

飛んで勢いがあったんだろう。一瞬の内だったね。これで終わりだと言っただろう？待ち伏せしとくなら、トラップは常套手段だぞ。程なく、すべてのゴブリンが影の中に沈んだ。

よし　今回の魔法練習と薬草採取は終わりだ。やはり、立ち止まったまま魔法を使うのは楽だったな。トラップも正常に作動したし、万々歳だ。

さて、帰るか。

…

…

…

～その後～

とある魔導士の家にて

「おはよう、婆さん」

「あぁ、おはよう」

「見てくれよ。ゴブリンの葉っぱを6枚もゲットだ！」

「……ちゃんとゴブリン達は森に返したんだろうね？」

「当たり前よ。葉っぱ採ったら返してあげたさ」

「それならいいさ」

という会話があったとかなかったとか

見つけた

ゴブリンの葉っぱ6枚という大挙を成し遂げてから数ヶ月が経った。

あれから6匹の集団が現れることはなく、残念な日常を送っている。しかもこの数ヶ月で身長も伸びたから、新しいスーツ代に貯めたお金が消えてしまった。

何て儚いんだ。お金なんて貯めても貯めても出て行く一方だ。一人暮らしって大変なんだな。婆さんのありがたみを感じるよ。人間って金が無ければ、生きて行けないのさ。

ちなみに今は婆さんから頼まれた買い出しの帰り道だ。マグノリアは普段通り、活気に溢れていた。しかし、もう夕方だぞ。

かなりの量を買わされたんだが、あの婆さん……私のことを何だと思っているんだ。

運び屋じゃないんだぞ。カナとリサーナに買い物を手伝って貰わなかったら時間が足りなかった所だ。あとでしっかり報酬を貰わないとな。

……まぁ、荷物は全て影の中に収納しているから楽チンなんだがな……。

それにしても見渡す限り誰もいない。既に人里から離れている獣道を歩いているから、誰もいないし人工物もない。

ふむ、自然しかないというのも飽きてくる。薬草タバコでも吸いながら歩くか。魔力も減ってきたしな。

私はそう考えると懐から小さな箱を取り出す。

そしてｂｏｘ型の箱から一本の細長い１０センチほどの、中に乾燥した薬草が詰まった白い棒を取り出し、口に沿えた。

じゅぽ　と安物のマッチを使い火をつけると、すぐに消えないよう、手を添えて口元の煙草の先端に火を近付ける。

そして一度、軽く吸うと火が灯ったようだ。先端から煙が出てきた。それを確認すると吸った煙をすぐに全て吐き出す。

私は一度目は肺に入れないタイプだ。そして2度目からはゆっくりと肺にいれ、薬草を体全体に馴染ませるように楽しむ。

うむ、やはりうまい。さすがは婆さん特性のモノだけはある。私が作るのは不味いからな。

「ふぅ～」

このタバコの原料である薬草は、微々たるものだが魔力を回復する効果がある。

影の中に荷物を収容する魔法【影倉庫】は常に微量の魔力を喰うからな。こうやって適度に回復させないといけないのだ。

まぁ普段は、吸わなくても自然回復でどうにかなるんだが、今日は大量に入れているからな。量が多いと消費魔力が多いのだ。

最初はタバコではなく、飴玉だったんだが、これが不味いのなんのって喰えたモノじゃなかったからな。タバコの形にしてもらった。

それにしても、薬草タバコのくせにして何たるコクと香しい匂いだ。本物のタバコにも劣っていないぞ……と思う。

吸ったことないから分からないんだよな。ただし、メンソールがキツい。これは薬草タバコの宿命だな、諦めるしかないか。

そう考えながら帰路につこうとしたとき、前方に人影を見つけた。誰だ……こんな夕暮れに人だと？

こんな時間に来るのは…爺さんしかいないか？まぁ、近づけば分かるか。

【転影移】

そう呟き、足元に魔方陣を展開させる。そして煙草を銜えたままズブズブと、体を影に沈ませ前方に見える人影まで転移。

…

…

…

「よっと、やっぱりか。よぉ、爺さん、薬貰いに来たのか？」

前方の人影に転移し影から這い出ると、そこにいたのは案の定、爺さんだった。

「ナナシか！？…ビックリさせるでない！　お主こそ何故ここにおる。勉強はよいのか？（相変わらず、気配を感じなかったのぅ）」

爺さんは私を見上げながら言葉を吐いた。それにしても、相変わらず小さい爺さんだ。

「あぁ、今日は買い出しを頼まれたんだよ。それよか……歩きながら話そうぜ」

お主が止めたんじゃろうが！　と叫ぶ爺さんを置いて、私は煙草を吸いながらスタスタと歩く。

「待たんか！」

「待てないな。早歩きで歩くのも体力作りの一環だからな」

「それで体力はついたのかの？」

ふっ。何言ってやがる

「そろそろ疲れて来たから、ゆっくり歩くぞ」

「はぁ、相変わらずの体力のなさじゃな」

失敬な爺さんだ！　これでも二キロのランニングは出来るようになったんだぞ！　でも三キロは無理だ。

あぁ、何故だ。魔法に比べて体力がつくのが遅すぎる。ナイフの方も成果が上がらないし、踏んだり蹴ったりだよ。

「ナナシ！！！」

むっ。大声出してうるさいぞ。

「何だよ、爺さん？」

「儂の他に誰か人を見なかったかのぅ？　連れと、はぐれてしまっての」

「んにゃ、見てないな。てか何だ、連れがいたのか……練習がてら

探してきてやるよ。この森で迷ったら大変だからな。んじゃまたあとでな、爺さん」

「ちょっ、待」

……

……

……

マカロフが叫んだ時には既にナナシは姿を消していた。

（儂……誰が連れなのか、言ってないのじゃが……相変わらずな奴じゃ……）

そう考えたが、「まぁ、大丈夫じゃろ。儂、知ぃらなーい」と呑気に言うと、ポーリュシカの家へと歩みを進めた。

……

……

……

「あーぁ、失敗したな。誰が迷子になったか聞いておくんだった」

現在、私は爺さんの連れを探しているのだが、見つかっていない。やはり探索魔法を使うか？　しかし、今は探索魔法を使わずに探索する練習だしな。

そう考えている時。森の奥で何かが蠢くのを視界に捉えた。

ん？　魔物か？……いや、人みたいだな。遠すぎてよく分からないが、一応行くべきだろう。

【転影移】

人影に転移。

「ふぅ、やっぱり人だったか。誰だ～迷子のば！？【転影移！】〔ガシッ〕ぎゃっ！」

「やっと見つけた！　ナナシ！」

「あぁぁぁぁぁあたまが！？」

私が転移した場所には、誰かいたが、その誰かが問題だった！？

コイツを見た瞬間、再び転移を使い逃げようとしたが……影に潜る前に頭を掴まれてしまった。

あぁ終わりだ、すべてが終わった。てか、頭が痛い。掴む力を間違えているぞ。

「ミラ……ジェーン」

「どこに居やがった！」

「ば、婆さんに頼まれて買い出しに行ってたんだって痛い痛い痛い、掴みすぎだ！　馬鹿野郎が！」

「ふんっ！！！」

「痛！？」

ぐおぉぉ、投げやがって……何て力だ。この野郎がぁ！

「それよりさっき、何で逃げようとしたんだ？　言えよ。あぁ？」

【ぐりぐり】

「いって！　足で頭を踏んでんじゃねぇ！」

「……あぁん？」

くっ何て乱暴な女だ！　もう少しお淑やかにできないのか……ぐおぉぉ、頭が痛い。同じ場所を的確に踏みやがって！　二度攻めか。この悪魔がぁ！！！

【ぐりぐり】

「ふっふっふ、それにしても可愛いな、ナナシ♪」

「ドS！？」

現在、地面に横たわっている私の目の前で腕を組み、グリグリと私の頭を踏んで頬を蒸気させているドS少女の名前はミラジェーンと言う。

通称ミラだ。ちなみに13歳だ。あと少しで私も13歳のため、同い年だろう。ペチャパイめ、顔が可愛いだけで女の欠片すらない奴だ！

【ぐりぐり！！！】

「ぐえぇ！？」

「今、変なこと考えただろ？」

「め、滅相もございません！」

真っ白な長い髪をポニーテールにして、たれ下げている。服は子供らしくないヘソ出しの黒のキャミソールに短パンと太ももまであるニーソを履いていた。

最近、爺さんのギルドに入ってきた新人なんだ。

【ぐりぐり】

あぁ何故、私はコイツと知り合ってしまったんだ。あの時、フェアリーテイルに薬なんか届けなければよかった。

そして欲望の限りに動かなければよかった。可愛すぎるコイツが悪かったんだ。今では悲しいことに、尻に敷かれ始めている。

「聞いてんのかよ！ナナシ！」

「あぁ、聞いてるよ。とにかく足をどきやがれ、痛いだろうがよ……」

「ちっ」

……何でそんな残念そうな顔で足を退けてんだよ！？

「……逃げようとした理由はあれだ……」

「何だよ？早く言えよ」

そんな顔で睨むなよ、青筋浮いてるし顔がヤバいぞ。初めて見た時はあんなに可愛かったのに……いや、今でも十分に可愛いが。って、それより早く脱出しよう。

「まぁ……あれだあれ……ん？誰だアイツら？」

「あ？」

「あっ！　あんな所にエルフマンとリサーナが！？　危ない！？」

そう言って、私がミラの後ろを指すと

「何！？」

ミラは瞬時に振り返り、二人を探し始めた。おぉおぉ、何て優しいお姉ちゃんだ。家族愛　それも良し。だが、私は忙しいからな。お暇させてもらうぞ。

【転影移】

じゃに〜

……

……

……

「……いないじゃない。一体どこにいるのよ。ナナ……し……」

ミラが振り返った時には既にナナシはいなかった。また騙されたと呟いたミラはぷるぷると体を震わせると大声で叫ぶ。

「ナナシ！　ぜってぇ！　ぶっ倒す！！！」

……

……

……

ひぇ～くわばら、くわばら

私を探す声が、ここまで聞こえるとは……ミラ……恐ろしい子！？　しかし、もう辺りは暗くなってきたし、私を探し出すのは不可能だな。勝った！

とにかく一安心だ。あぁ、それにしても頭が痛い。踏みすぎだ、

バカミラが！

【ガツン】

いって！？　……あぁん？　こんなとこに岩なんてあったか？
と疑問に思う前に、壮大な音を立てて岩が崩れ落ちた……って

「は？　岩が崩れた？」

わ、私がぶつかっただけで岩が砕けただと？　私って実は凄い怪力の持ち主なのか！？　という冗談は後にして……何だこれは……
……はっ！？　トランクケース！？　ヤバいぞ、にげ

【ガシッ】

後ろから腕を掴まれた！？

「捜したぞ。どこに居たんだ、ナナシ」

あぁ、その声は……何故ミラといるんだ。お前たちは犬猿の仲だろうがよ。

「聞いているのか？」

ギギギと顔を後ろに向けると、ふてくされた顔のエルザが私の腕を掴み立っていた。しかし何故に、ふてくされているのだ。……いや……たぶん、私の記憶が確かならば……。

「あぁ、私の荷物を崩したことは許さんぞ」

「ごめんな」

あぁやっぱりね。てか、エルザの荷物多すぎなんだよ。クエストの帰りだとしても、どんだけ持って行ったんだ。

「ふっ、いいだろう。しかし、私の荷物をすべて持つなら許してやろう」

「へいへい」

手を掴まれている以上大人しくするしかあるまい。まぁ、影に入れるだけだから簡単さ

よっこらせと

「っておい、手を離せよ。動きづらい」

「ミラのように逃げられたら困るからな。それにしても、この勝負は私の勝ちだな。ふふん♪」

ちっ、逃げれると思ったのだがな。それにしても、何の勝負だよ。そんなに、ナイ胸張って喜ぶようなことなのか？

「ところで、ナナシ」

「何だよ。今日は無理だぞ。荷物を届けたら、私はすぐに帰るからな」

「最近、何をやっているんだ？」

「……別に……」

「それは私に言えないようなことなのか？　また変なことをしているのではあるまいな」

「ちげぇよ。変なことじゃない」

話を代えるか、てか、そろそろ時間がヤバいな。

「それより、もう時間も遅いんだ。早く帰らねぇと婆さんに「見つけた、ナナシ！」やばっ！？」

【転影ぃぶはぁ！？】

ぜ、ぜ、全力疾走してからの跳びだとぉ！？

うぉぉ……し、死ぬ……エルザ！？離しやがれ！え？何故、拳ぶふぅ！？

ミラの全力疾走＋跳び蹴りを喰らった私は吹き飛ぶ筈だった。しかし、しかしだ。私の腕を掴んでいるエルザが手を離さなかった。

そのため、ぐるりと半回転した後、エルザの方に向かい、何故か拳で沈められたのだ。

何故だ？　なして？　意味が分からない。

「てめぇ！　よくも騙しやがったな！　って何でエルザがここにいんだよ！」

「遅かったな。この勝負は私の勝ちだ。ふふん♪」

「最初に見つけたのは私だ。だから私の勝ちだ！」

「いやいや、私の勝ちだろう。それにナナシは渡さないからな」

「ふざけんじゃねぇぞ！　コイツは私のだ！」

「なんだ？　やるのか？」

「お、おい、こちとら重傷だ……ぞ。けんか……してる場合か、助け……」

一歩

「知っている天井か？　って痛！？」

目を覚ました私はゆっくりと上半身を起こした。体のあちこちが痛い。

痛みを堪えながら起き上がると辺りを見回す。状況把握をしないとな。ふむ……どうやら、どこかの部屋のようだ。

窓から見える風景は漆黒に染まっているから夜なのだろう。

部屋の隅には適当に投げ重ねられた服の塊と、その横に積み重ねられた魔導書の山。テーブルの上にある灰皿には大量の吸い殻がある。

それに加えて、そのテーブルの上に二つの精巧な人形が座っていた。……完全に私の家の中だ。何時帰ってきたのだろうか。

それにしては体中が痛い。頭はズキズキするし、腹辺りも尋常じゃない痛みだ。ぐおぉ！　それに引きずられてできたような傷跡があるぞ！

なんだこ「おっ、やっと起きた。何時まで気絶してんだ、長すぎんだよ」

「誰かさんが引きずって、ここまで運んだからではないのか」

「あぁ？　私のせいだと言いてぇのか！？」

「その通りだろう？」

「な！？　てめぇ！」

何？　このカオス

テーブルの上にいる人形達がお互いの髪を引っ張り始め……ん？上！？

「お前ら！　そこはテーブルだ、ボケ！　そこから降りんか！　横に椅子があるだろうがよ！！！」

「大体エルザが！」

「いやいや…ミラのせいだろう」

……聞けよ、私の話を……。

そう、テーブルの上で言い争いをしているのは先程、森の中で私に暴力を振るったミラとエルザだった。

あまりの衝撃に現実から逃避していたようだ。てか何故こいつらは私の家にいるんだ。

「なぁ、お前ら、何故ここにいる？というか、私の家には鍵が掛かっていたはずだが？」

私はさっきよりも痛む頭を押さえながら、何時もの喧嘩をしているミラとエルザに話し掛けた。

すると

「「ポーリュシカさんに鍵を貰った」」

二人はいがみ合いながら同時にまったく同じことを喋った。……これは聞こえてんのか。ということはさっきのは無視したのか！？

何て奴らだ。いい根性してんじゃないか。それにしても、実は二人とも仲が良いのではないのか？声がピッタリ合っていたぞ。

てか、時間がヤバいな。

「婆さんの所に行くか。早く荷物を届けないとな……よっこらせっ」

早く行かないと殺されるかもしれないからな。前に時間を守らなかったときは酷かったからなぁ。

婆さんは、本当に短気なんだから困ったものだ。っと、愚痴を言

う前に急ぐか。そう考えながら立ち上がると、婆さんの家に向かった。

ミラとエルザ？

二人とも喧嘩がヒートアップして家の物を投げ出したから放置だ放置。たぶん帰ってきたら、我が家は散々たる状況になっているんだろうな。

前もそうだったからな。何故、二人は仲良くできないか疑問だ。うぅ、今回もごめんな。私の魔導書達よ。きっと今頃バラバラだな。

ミラが投げて、エルザが剣で切っている光景が目に浮かぶよ。あぁ、私の家から変な音が聞こえてくる。魔導書は消滅してもいいが、私の秘蔵書と研究書よ。生き残ってくれよ。

まぁ、隠してあるから大丈夫だろうがな。

…

…

…

「入るぞ、婆さん。って、爺さんもいたのか」

私が婆さんの家に入ると、婆さんはマカロフの爺さんとお茶を楽しんでいた。

「おぉ、起きたか～」

「やっと起きたようだね」

えらく、のほほんとしてるな。

「少し、話をしようかの」

「話だと？」

「アンタの今後についてさ」

…

…

…

ポーリュシカの家にはナナシとポーリュシカとマカロフの三人がテーブルについていた。

「順調かの？」

「何の話だ」

「封印魔法の話じゃよ」

「婆さん、買ってきたものを部屋に置いておくぞ。私は帰るからな」

マカロフの声にナナシはすぐさま反応する。視線も合わせずに立ち上がったナナシは、部屋から立ち去ろうと歩き始めた。

「お主に出会って、後少しで一年じゃ。もう答えは出てるはずじゃろうからな。そろそろ話をしようかと思っての」

「何の話か、さっぱり分からないな」

歩きながらポツリと呟くナナシに、マカロフは話し掛ける。

「ナナシよ。お前さんはまだ若い。こんな所で腐らんでもいいじゃろ？」

「腐るだと？　どこが腐っていっているんだ？　私は薬草、魔法、他にも勉強している。それなのに腐るだと？　腐るわけがないだろうが！」

マカロフの言葉を聞いたナナシは足を止め、振り向き、睨みながら叫んだ。

「……知識を得るのは良い……じゃが記憶なんぞ封印してどうなる」

「あぁ？　喧嘩売ってんのか？」

マカロフは怒りを露わにして詰め寄ってきたナナシをジッと見つめる。

「もっと上を向いて生きてみよ。何を隠れてコソコソとしておるのじゃ」

「別に隠れてなんかいない」

「じゃあ、何故、魔法のことを誰にも話さんのじゃ。儂はともかく、ポーリュシカにも隠そうとするのは、何故じゃ？」

「……それは……」

そう言われると、先ほどまで威勢のよかったナナシは成りを潜ませる。そして唇を震わせながらマカロフから目を逸らし始めた。まるで何かから逃げるように……。

「儂の目を見よ！」

「っ！？」

「そんなに記憶を取り戻すのが怖いのか！」

「怖いに決まってんだろ！」

再び怒鳴るとナナシは無意識のうちに、ぎゅっとスーツの裾を掴んだ。

ナナシは封印魔法を勉強するに辺り、自分のことを真剣に考え、己の愚かさを悔やんだ。今まで避けていた。いや考えかけていたが、逃避していたことを。

「私は……記憶喪失者なんだ……」

ナナシがソイツと命名したソイツがナナシなのだと。記憶はなくても、ナナシではなく、自分はソイツなのだと。

「だから何じゃ。大丈夫じゃ。記憶を取り戻したりしたとしても、お前さんはお前さんじゃよ」

「っ！？　……ほ、本当にそうだろうか……記憶を取り戻したら私は私じゃ無くなるんじゃないのか……」

マカロフの返答を聞く前にナナシは、今まで溜め込んでいたものをすべて出すかのように、矢継ぎ早に言葉を吐き出す。

「私は何者か。どこで生まれたのか。何をしていたのか分からないんだぞ！　それが分かったら……私は私でなくなってしまう可能性のほうが高いじゃないか！」

ナナシは勢いに任せ、声を荒げた。それでもマカロフは揺るがず、鋭い真剣な眼差しで見る。それをナナシは睨み返す。

「それでもお主がお主として今、ここに生きていることには変わりはないのじゃ。記憶なんぞ思い出しても大丈夫じゃよ。お前さんが自分を忘れない限りの。未来は誰にも分からないのじゃ。決めつけだけで生きるのは辞めたほうがよい」

「……だが、それだと迷惑を掛けるかもしれないんだ……」

「迷惑結構！！！」

「っ！？」

全身を震わしながらナナシが言葉を発すると、マカロフはいきなり大声で叫び立ち上がった。ナナシはビクリと驚き、俯いていた顔を上げ怯えた目でマカロフを見た。

「ガキが何を生意気なことをいっておる！　何のために大人がおると思うのじゃ！」

そう叫んだマカロフは一呼吸置くと　にかりと笑う。

「困った時はガキはガキらしく、大人を頼ればいいのじゃ。そのために儂らがおるのじゃからな」

「……」

マカロフはそう言った後、顔を伏せ、沈黙を続けるナナシに語る。

「別に今日、答えを出さずとも良い。ゆっくりと考えてみよ。儂は何時でも助けてあげよう」

そう言葉を掛けると家を出て行った。残されたのはポーリュシカと俯くナナシの二人。

「もうそろそろ、あんたが勉強を始めて一年が経つ頃だ」

今まで黙っていたポーリュシカが喋り出す。

「やりたいことは見つかったかい？」

「……自由だ……」

ナナシはポツリと呟く。

「婆さん、私は自由に生きたいんだ。何でもやりたいんだよ」

ナナシが出した答えは自由に生きること。時間が経てば経つほど、やりたいことが増え、辿り着いた答えが自由だった。

俯いたままのナナシにポーリュシカは、ふんっと鼻を鳴らす。

「ならば、すればいいだろう。自由に生きてみな。何を迷う必要があるのさ」

「だから記憶が邪魔なんだ。私が記憶を思い出せば変わってしまう。……やりたいこともな……」

「それはあんた次第さ。人は誰もが変わっていく。思い出してみな。あんたは記憶を思い出さなくても変わったんじゃないのかい？」

「……」

「人と触れ合い、何かを学び、そしてあんたは答えを捻り出したん

だ。一年前のあんたと今あんたは何かが違うはずだよ」

そう語るポーリュシカに対してナナシは乱暴に椅子に座った。その姿を見てポーリュシカは一度だけ長く目を閉じると、再びナナシに視線を向ける。

「仮にあんたが言う記憶を思い出したとしても、変わってもいいし、変わらなくてもいいんじゃないのかい。それこそ自由に選べばいいじゃないのさ」

「……」

ナナシは沈黙の中で、しばらく考えていた。そしてポツリと呟く。

「……婆さん達の言うことは理解できるんだ……」

……

……

ナナシは暗闇に包まれた窓の外をじっと見つめたまま、しばらく黙って座っていた。

…

爺さんが出て行って既に3時間が経つか。その間に、様々なことが頭に浮かびは消し、浮かびは消しと言うことを繰り返していた。この数か月に自問自答してきたことも考えた。しかし、何時ものごとく、結論は出ない。だが、私が生きたいと言うことは変わらない。

……自由に生きる……。それが一年間で私が考え付いたやりたいこと。曖昧だが、何でもやりたいから一つに選ぶことはできなかったのだ。

それに爺さん達は知らないようだが、記憶の封印は失敗した。そう、見事に失敗したんだ。

記憶を思い出す等の、何の兆候もないのに封印など無理だったのだ。実感もない。魔法も正常に作動したか分からない。本当に習得できているかも分からない。分からないことだらけだ。……でも結局、それが答えなのかもしれないな。

爺さん達の言う通り、未来はどうなるか分からない。それに私が記憶を思い出したからと言って私が消えるわけじゃない。私はソイツなのだから、ただ道の選択肢が増えるだけなのかもしれない。

はぁ、どんなに未来を考えても答えは出ないんだ。結局、思い出した後にしか、どうなるかは分からないんだよな。

どうせ分からないんだ。ならば、それまで好きなように生きてみるか。このままウジウジしてるとエルザ達にも怒られそうだしな。

よし、このことは記憶を思い出した時に考えればいい。今は自由に生きてみよう。

そう考えると、私は婆さんに私の思いを話した後、外に出て爺さんがいる場所まで歩いた。どうやら爺さんは月見酒をやってるみたいだ。

至る所に酒瓶が転がっている。ジジイのくせに飲み過ぎだ。でも、今を楽しく生きているということか……爺さんらしいのかな。そのまま爺さんの背後に立つと一緒に月を見上げながら話し出した。

「もう決まったかの？」

「あぁ」

「早いのぅ」

「そうだな。だから、この考えはブレるかもしれない。耐えきれずに逃げ出すかもしれない。でもよ……爺さん」

そこで一呼吸置き、振り返った爺さんの目に視線を向ける。

「未来が分からないのは誰だって同じなんだよな。私だって、これからどうなるか分からないんだ」

再び顔を上げ、月を眺めた。綺麗な満月だ。

「もう少し、前に進んで見ようかと思う。進まなきゃ何も始まらない。前にしか未来はないんだ……だから……だから、私が私であり続けるために外の世界を見てみたい。自分の好きなことをやりたい。大切な友を守れるようになりたい」

顔を戻し、再び爺さんの目を見る。

「……だからよ……」

酒の影響で真っ赤になった顔だ。だが、目は真剣そのもの。この爺さんは凄い人なのかもしれないな。今になって実感するよ。

「私をフェアリーテイルに入れてくれ！」

思い切り頭を下げ、そう言う。爺さんは私から体を背けてると言葉を発した。

「自分の信じた道を進め……それがフェアリーテイルの魔導士じゃ、よいな？」

「あぁ……ああ！」

進もう……自分で選んだ道を……最高の未来を目指して。

今日から私はフェアリーテイルの魔導士だ！

月明かりが照らす、この場所が私の新たなスタート地点だ。　私は生きる、私として自由に。

…

…

…

ん？　何だ？　この焦げた匂いは…。

ふと私とマスターが月を眺めて感慨にふけっていると、どこからか焦げた匂いが漂ってきた……。

まさか……ぎぎぎとマスターと共に後ろを振り向くと……大量の煙と真っ赤に染まる空が見えた。

「あ、あそこは！？」

「……私の家のある場所だ……」

そう言うやいなや、私は【転影移】を使いマスターを置いて一人、家に向かった。そして私が見た光景は……運び出された秘蔵書達が焼かれている姿だった。

あぁ……私の秘蔵のグラビア写真集が……。私は膝から崩れ落ちると涙を流した。あぁ私の心の支えがぁ……。

その横でどこか、ふてくされた顔をした妖精が、二人佇んでいたが見なかったことにした。

そんなに巨乳がいいのか、燃やして正解だ、とか呟いている。

「うむ、山火事だったんだな」

私は一歩、進んだ気がする。

一歩（後書き）

誕生～形成編、終了。

やっとフェアリーテイルの話になります。

記憶関係は一旦終息。

今回は凄いグダグダでしたね。最後とか展開早すぎ。悩み話等をあと、５、６話続けるのが普通なんでしょうが……ダメですね。作者にはシリアス風がとことん書けない。

精神論もめちゃくちゃだ。ちなみに今後、シリアス風は減少します。

前書きでも書いた通り、ミラ達、ストラウス姉妹（弟）との出会いは～影～で書きます。

今後は読んだことがある話とない話の半々ぐらい……だと……思いたいですね。

ダメ男がハーレムとか変な話ですが、今後もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4195z/

名無しの影使い

2012年1月11日01時48分発行